

オツカムにおける帝権と教権（一）

——ウィリアム・オツカム研究（三）——（1）——

小林 公

第一章 バイエルンのルードヴィヒとヨハネス二十二世

ハプスブルグ家の神聖ローマ帝国皇帝アルブレヒト一世の亡き後、同じくハプスブルグ家のフリードリヒをはじめとして、フランス国王フィリップ四世の推挙するヴァロア伯シャルルなど複数の国王候補者のなかから、マインツ大司教ペーター・アスペルトを中心とするドイツ選帝侯は一三〇八年十一月レンゼでルクセンブルグ家のハイน์リヒ七世をドイツ国王に選挙した。しかし、フランス国王の権力の強大化をおそれ当初はハイน์リヒを支持しローマでの皇帝戴冠を認めた教皇クレメンス五世は、ゲルフィとギベリーニへと分裂したイタリアを皇帝権のもとに統一すべくハイน์リヒ七世がイタリア遠征を企てるに及び、アヴィニョンに教皇庁を移したローマ教皇のイタリア支配がハイน์リヒにより脅かされるのをおそれ、ゲルフィ党の首領でナポリ国王アンジュー家のロベルトとともにドイツ国王ハイน์リヒを表面的には支持しつつも、そのイタリア統一の試みに対抗する政治政策を採用するに至る。他方、ハイน์リヒも当初は教会への忠誠を誓約し、前任の皇帝が教会に対して認めたあらゆる特権を再度確認し、更には教皇領への不侵入と教皇領における裁判権の不行使を約束したものの、彼の意図したゲルフィとギベ

リーニの和解の試みは実現せず、イタリア遠征の当初はイタリアに平和をもたらす者としてゲルフィとギベリーニの両党から歓迎されたハインリヒ自身も、結局はギベリーニ党の首領として両党派の争いに巻き込まれていった。とくにハインリヒがミラーノで「鉄の王冠」を受けた数日後、ミラーノのゲルフィ党支配者デルラ・トーレ家がギベリーニ党のヴィスコンティ家により支配権を奪われるに及び、ローディ、クレモーナ、ブレッシャなどグエルフィ諸都市はハインリヒに対し門戸を閉ざし、これら諸都市をハインリヒが暴力行使により占領したことからグエルフィ党は一致団結してハインリヒのトスカーナ通過を阻止し、結局ハインリヒはジェーノヴァを経由してピサに赴き、その後海路を利用し一三二二年五月にローマに到着することになる。しかし、ローマにおいてもハインリヒはナポリの軍隊により聖ピエトロ寺院での皇帝戴冠を阻止され、結局はギベリーニ党及びローマ市民の熱狂的な支持のもとに聖ヨハネ寺院で一三二二年六月ローマ皇帝として戴冠した。かくして聖ピエトロ寺院以外の場所での皇帝戴冠を承認せず、基本的にはハインリヒの皇帝戴冠自体に消極的な態度をとるクレメンス五世も、ギベリーニ党及びハインリヒ戴冠を熱狂をもって迎えたローマ市民の圧力に屈し皇帝戴冠を承認することになるが、承認の条件として、ナポリ王国を攻撃せずロベルトとの休戦を約束すること、戴冠の当日にローマを退去し以後教皇の許可なくローマに侵入しないこと、ハインリヒがゲルフィ党から略奪した領域の返還などを要求した。しかし、この要求のなかに自らイタリアを支配しようとする教皇の真意を読みとったハインリヒは公然と教皇に敵対し、教皇特使が彼に要求した教皇への忠誠の誓約を拒絶してイタリアにおける自己の権限の至高性を主張することにより、イタリア統一を更に進めようとするが、ゲルフィ党の中心都市フィレンツェへの攻撃は失敗に終り、ハインリヒはピサに退いた後ナポリのロベルトへと攻撃の矛先を向け、一三一三年四月ロベルトを皇帝への大逆罪の故に断罪すると同時に王権剝奪を宣言し、ジェーノヴァ、ピサその他のギベリーニ派と同盟を結んでロベルト攻略のために南下を企てることになる。これに対しクレメンス五世は、ローマ教皇の封建的家臣たるナポリ国王を攻撃

する者に破門を宣告しハインリヒに対抗するが、一三一三年八月ハインリヒが南下の途中シエーナの領域ブオンコンヴェントで病死することにより、皇帝によるイタリア統一は水泡に帰し、クレメンスは教令〈*Romani princeps*〉で皇帝戴冠に前後してなされたハインリヒによる教皇への忠誠の誓約は有効であり、皇帝は教皇の封臣であることを宣言し、更に教令〈*Pastoralis cura*〉では帝権に対する教権の優位を説き、ロベルトはローマ教皇の封臣であつて帝権には服さないこと、ロベルトに対しなされたハインリヒの断罪は無効であることなどを宣言し、極端な教皇至上主義を明らかに打ち出すことになる。

かくしてハインリヒ亡き後、イタリアは再びゲルフィとギベリーニの間の錯綜した政治抗争と場となり、他方ドイツでは空位となったドイツ国王の地位をめぐって特にハプスブルグ家とルクセンブルグ家の間で対立が生じ、これに加えて実子フィリップを皇帝に擁立しようとするフランス国王フィリップ四世の暗躍により、ドイツ国王選挙は極めて複雑な政治的対立関係のなかで行われることになった。しかし、一三一四年、表面的にはフランス国王を支持しフランスからの皇帝擁立を選帝侯に働きかけていた教皇クレメンス五世が死去することにより、ドイツ国王選挙をめぐる対立はハプスブルグ家支持とルクセンブルグ家支持の選帝侯間の対立に限定されることになり、このようにして教皇庁の空位とドイツ国王の空位が並存する状況のなかで、国王選挙が進められていく。

さて、ハインリヒ七世の死後、上記の情勢のもとでルクセンブルグ家の支持を受けながらドイツ国王として選挙されたのがヴィテルスバッハ家のバイエルン公爵ルードヴィヒであり、ルードヴィヒはその後、クレメンス五世の後継者ヨハネス二十二世との激しい対立関係においてパードヴァのマルシリウス、ジャン・ド・ジャンダン、ウィリアム・オッカムなど当時の異端的思想家の庇護者として中世思想上重要な役割を演ずることになる。オッカムの帝権教権論は、バイエルンのルードヴィヒとヨハネス二十二世との政治的抗争を背景としており、それ故本稿(第一章第一節)では一三二四年ドイツ選帝侯によるヴィテルスバッハ家のルードヴィヒとハプスブルグ家のフリ

ードリヒの二重選挙に始まり、一三二八年ローマでのルードヴィヒによる対立教皇ニコラウス五世の擁立へと至る歴史的過程を概観することにした。⁽¹⁾

(一) 二重選挙（一三一四年）から対立教皇の擁立（一三二八年）まで

ハインリヒ七世の死後、ドイツ選帝侯のうちハインリヒ七世の弟でルクセンブルグ家の中心的指導者であったトリートア大司教バルドウィン⁽²⁾は、同じく選帝侯の一人であるマインツ大司教ペーター・アスペルトと協力しハプスブルグ家の国王候補者に対抗すべく、ハインリヒ七世の実子で一三一〇年以来ドイツの皇帝代理の地位にあったボヘミア国王ヨハネスをドイツ国王に推挙したが、これに対し公爵レオポルトを中心の指導者とするオーストリアのハプスブルグ家は、南ドイツの諸都市ウルム、コンスタンツ、チューリヒ、ケンプテンなどと同盟を結び、更には選帝侯の一人であるケルン大司教ハインリヒ・フィルネブルグの支持を得て、レオポルトの兄でオーストリアのハプスブルグ家の公爵フリードリヒをドイツ国王に推挙した。しかし、一三一三年コブレンツ及び一三一四年一月と六月の二回にわたるレンゼでの選帝侯会議において両陣営は自らの主張をともに譲らず、この過程でルクセンブルグ家はヨハネスの国王選出が不可能であることを悟り、ルクセンブルグ家以外の候補者を顧慮するようになる。当時ハプスブルグ家とルクセンブルグ家はボヘミアの支配権をめぐり緊張関係にあり、バルドウィンがボヘミア王ヨハネスを国王に推挙したのはボヘミアにおけるルクセンブルグ家の未だ不安定な支配権をより強化していくこともその動機の一つと考えられ、従ってハプスブルグ家を支持する選帝侯たちがヨハネス選出に同意することは当初から実現不可能なことであった。そこでルクセンブルグ家はペーター・アスペルトの意見に従がい、当時低地バイエルンのヴィテルスバッハ家の後見をめぐりオーストリアのフリードリッヒと争い、ガムメルスドルフの戦い⁽²⁾でこれを破り勇名を轟かせていた上部バイエルンの公爵ルードヴィヒに目を向け、ルードヴィヒを王位に推挙する方針を固めていたのである。ルクセンブルグ家にとり、ヨハネスの国王選出が不可能である以上、ヨハネスに代ってドイツ

国王となる者は強力な支配者であつてはならず、しかもハプスブルグ家の勢力拡大を牽制しうる者でなければならぬ。ヴィテルスバッハ家のルードヴィヒはこの意味で適格な国王候補者と思われたのである。以後、ルクセンブルグ家の支持のもとにルードヴィヒは国王選出に向けて様々な支持者の獲得に乗り出すが、先ず、彼の有力な支持者で選帝侯でもあるマインツ大司教ペーターにはゼーリゲンシュタットやバッハガウ伯爵領などの領有その他の特権を確約し、またバルドウィンに対してはミンスターマイフェルトその他の領有や、大司教区での最高裁判権その他の特権授与を約束した他、更にボヘミア国王ヨハネスにはポーランドやマイセン辺境伯領などを支持に対する報酬として確約した。また、ルードヴィヒは自己の忠実な臣下ヘンネベルグ伯爵ベルトルトの助力のもとに、選帝侯のうちブランデンブルク辺境伯ヴォルデマールとザクセン＝ラウエンブルク伯ヨハネスの支持を獲得したのである。

さて、既に述べたように、ドイツ国内での抗争と並んでドイツ国王(すなわち神聖ローマ帝国皇帝)選挙に強い関心を示したのはフランス国王フィリップ四世である。フィリップはハインリヒ七世の選挙に際してもヴァロア伯シャルルを候補者として推挙したが、今回もフランス王家から皇帝を選ぶことがヨーロッパの統一及び十字軍計画のために適切であることを主張し、実子のポアトゥー伯フィリップ(後のフィリップ五世)を皇帝に推挙し、ローマ教皇を通じてドイツの選帝侯、とくにトリニアのバルドウィンにフィリップ選出を積極的に働きかけていたが、結局選帝侯はこの要求を拒否し、フィリップ四世の野心は今回も実現されないことになった。それ故、ドイツ国王選挙は、ルクセンブルグ家支持のバイエルンのルードヴィヒとハプスブルグ家のフリードリヒがともにあい讓らぬ情勢の下に進められ、一三二四年十月の二重選挙へと突入することになる。⁽³⁾

ハプスブルグ家のフリードリヒの支持者たちは二重選挙を予想し自らの主張を武力で貫徹すべくマイン河左岸のザクセンハウゼンに集合し、十月十九日フリードリヒを国王に選出した。フリードリヒを選挙した選帝侯は、ルー

トヴィヒの兄でありバイエルンをルードヴィヒとともに共同統治していたが皇帝選挙でルードヴィヒと対立しハプスブルグ側についたプファルツ選帝侯ルドルフ、ルクセンブルグ家のハインリヒ七世によりボヘミアから追放された後もボヘミア国王の地位を断念することのなかったケルンテン公爵ハインリヒ、そして更にザクセン・ウィッテンベルグ公爵ルドルフであり、更にザクセン・ハウゼンの集会には参加しなかったが従来よりハプスブルグ家を支持してきたケルン大司教ハインリヒがこれに加わる。その他選帝侯以外では、ザルツブルグ大司教ヴィヒャルト、ストラスブルグ司教ヨハネスなどがフリードリヒを支持すべくザクセン・ハウゼンの集会に参加した。これに対し、ヴィテルスバッハ家のルードヴィヒを支持する選帝侯、すなわちルクセンブルグ家側の選帝侯はマイン河の右岸に陣をとり、十月二十日ルードヴィヒを国王に選挙した。すなわち、マインツ大司教ペーター・アスペルト、トリアー大司教バルドウィン、ボヘミア国王ヨハネス、ブランデンブルグ辺境伯ヴォルデマール、そしてザクセンの支配権に関してザクセン・ウィッテンベルグ公爵ルドルフと対立していたザクセン・ラウエンブルグ公爵ヨハネスの五人がルードヴィヒ支持の選帝侯である。それ故、国王選挙に参加した両陣営の総計九人の選帝侯のなかで、ボヘミア国王に関してはケルンテン公爵ハインリヒとルクセンブルグ家のヨハネスが対立しており、ザクセンに関してはルドルフとヨハネスが相互に国王選挙の投票権を否認しあっていた。すなわち、ケルン大司教、マインツ大司教、トリアー大司教、プファルツ選帝侯、ブランデンブルグ辺境伯、ボヘミア国王、ザクセン公爵の七選帝侯のうちで、最後の二者の投票権について対立が存在したのである。しかし、当時の国王選挙については多数決の原則は採用されてはおらず、更にフリードリヒとルードヴィヒの選挙は伝統的な選挙手続からみてそれぞれ欠陥のあるものであった。ルードヴィヒは、選挙の三ヵ月後それまで両陣営の敵対関係を恐れ門戸を閉ざしていたフランクフルトの市民に迎えられ、従来の伝統に従って聖バルトロメウス教会で国王として承認された後、十一月二十五日アーヒエンでマインツ大司教ペーターの手により王笏、地球儀など皇帝の権標を授与され、聖衣の着用から聖油による聖別を

経て王冠の授与へと至る戴冠式を挙行したが、伝統的な手続ではケルン大司教が戴冠をとり行うべきものと規定され、この点マインツ大司教の手になるルートヴィヒの戴冠式は重大な法的瑕疵を含むものであり、更にアーヒエンのマリア教会所蔵の帝権の権標は真正の権標ではなかった。儀式行為の法的効果に対する当時の強い信仰からみて、この儀式上の瑕疵は極めて重大な欠陥と考えられたが、これに対するフリードリヒも、選挙の後伝統的な手続に合致してケルン大司教により王冠を授与され帝権の真正な権標を与えられたものの、ザクセンシュピーゲルで規定されたアーヒエンではなくボンの聖カシウス教会で戴冠が行われたことは、同様に重大な瑕疵を含むものであった。

それ故、ルードヴィヒとフリードリヒの対立は武力によることなくして決着がつくことはなく、以後両者は自らの支持者獲得に努めながら、結局は八年後の一三二二年にミュールドルフの戦いで相對峙することになる。選挙の後フリードリヒとルードヴィヒは、クレメンス五世の死後枢機卿の対立の故に空位の続くローマ教皇庁に対し「将来の教皇」を名宛人として選挙結果を直ちに報告し、それぞれ自らの正当性をローマ教会に対し主張したが、両者の抗争は先ずドイツの要地アルザスをめぐって先ず表面化し、ルードヴィヒはペーター・アルペルトの意図に従がいアルザスにおけるハプスブルグ家の勢力を除去すべくラインの諸都市を味方にひき入れ、自らはフランクフルトからシュパイアーへと南下してアルザスでの戦いに備えた。他方フリードリヒ側も弟のレオポルト及びハインリヒとともにハーゲナウ更にはゼルツに居を構まえ、ストラスブルグの支持獲得に努めながらルードヴィヒとの戦いに備えた。しかしこのとき、ルードヴィヒは自己の軍事力の弱さを自覚しシュパイアーから退却してしまい、結局アルザスはハプスブルグ家の支配が続き、両陣営の間の戦いはミュールドルフまでもちこされることになる。この後、ルードヴィヒはスイスのヴァルトシュテッテ諸州をハプスブルグ家の圧迫から解放し、またミュンヘンの兄ルドルフとの和解を通じて自己の国王権の承認を得るべく、ルドルフに上部バイエルンの統治権及び低地バイエルン

の未成年の公爵たちの後見権を与えようとしたが、結局バイエルンではルードヴィヒの力が優勢となり一三一九年最後までルードヴィヒに敵対した兄ルドルフが死去するに及び、ヴィテルスバッハ家とルクセンブルグ家は共同してハプスブルグ家に対抗する終生の同盟を確約しあった。特に、ボヘミアにおいてフリードリヒと同盟した当地の貴族の反抗に出会い自己の支配権の確立に苦心していたルクセンブルグ家のヨハネスをルードヴィヒは援助し、ボヘミア貴族（とくにリップパのハインリヒ）とヨハネスとの調停を通じて両者の分割統治を採用することにより、ボヘミアに対するルクセンブルグ家の支配権を一応維持することに成功したのである。

しかし、選挙された二人の対立国王にとって特に重要な問題は、言うまでもなくローマ教皇の支持の獲得であった。一三一四年四月クレメンス五世が死去した後、ローマ教皇庁は、教皇庁をローマに再び移すことを主張するイタリア派の枢機卿とアヴィニョンを教皇庁として主張するフランスのガスコニユ派の枢機卿が対立していた。そこで、マインツ大司教ペーターの意見に従ってルードヴィヒはイタリア派の枢機卿、とくにコロンナ家に働きかけ、ペテロ・コロンナにイゼール及びローヌ河間の領域の領有と関税権そして貨幣鑄造権を認め、その他コロンナ家のステーフアノとヤーコポに私生子準正権を与えることにより、コロンナ家を味方に引き入れようとした。そして更に、イタリアにおける皇帝の総代理としてマルシユテッテンのベルトルドを任命しイタリア諸都市の支持獲得に努め、ジェーノヴァ、ヴェネチア、そしてウグツチョ・ダ・ファッジョーラの支配するピサなどの支持を得た。これに対してハプスブルグ家のフリードリヒも、彼の王妃イザベラの父アラゴン国王ヤコブス二世の援助のもとにイタリア諸勢力の支持獲得に乗り出し、まず枢機卿のなかではナポレオン・オルシーニの支持を得て、更にパードヴァとトレヴィーゾをギベリーニ派の強力な支配者であるヴェローナのカングランデ・デルラ・スカラの支配から保護し、パードヴァにはハインリッヒ・ケルンテンを自己の代理として置いた他、ミラーノ、ファッジョーラ家失墜後のピサそしてギベリーニ派カストルツチョ・カストラカーニの支配するルッカなどを自己の味方に引き入れた

が、フリードリヒにとり最も重要なことはイタリアのゲルフィ党ナポリ国王ロベルトの支持を得ることであった。当初フリードリヒは、アラゴン国王ヤコブス二世の弟でギベリーニ派のシチリア国王フェデリーコ三世との同盟を考え、妹カタリーナとフェデリーコ三世の息子との婚姻を計画したが、アラゴン国王ヤコブスは、シチリアのギベリーニ党とハプスブルグ家の結合が、教皇によるフリードリヒ承認に有利に作用することはあり得ず、むしろフェデリーコ三世の敵であるロベルトとの結合を通じてイタリアのゲルフィ党と同盟を結ぶことが教皇の承認を得る最良の方策であると主張し、フリードリヒもこの見解に従がい、妹カタリーナとロベルトの息子カラブリアのカルロとの結婚により、ロベルトを通じてローマ教皇の承認を獲得しよう試みた。フリードリヒはナポリのロベルトと一三一六年不可侵条約を結び、カラブリアのカルロをイタリアのゲルフィ派諸都市の皇帝代理と定め、ロベルトは新教皇選出の後、教皇に対しフリードリヒをドイツ国王として承認するよう働きかけることを約した。しかし、ロベルトはイタリアのギベリーニ党に対抗する意図でフリードリヒと同盟を結んだものの、彼の本来の政治的目標は、アンジュー家の支配の下に統一的なイタリア王国を築くことであり、そのためにはドイツ国王（従って神聖ローマ帝国皇帝）の空位はむしろ彼の望むところであり、事実ハインリヒ七世の死と前後してロベルトは既にクレメンス五世に対し、教会、イタリアそしてフランスの敵であるドイツ国王の選挙を成立させないこと、そしてたとえ国王が選出されても承認を与えないこと、更に、承認はしてもドイツ国王が皇帝戴冠のためにイタリアに降下することを阻止することを要請していたのである。それ故、ロベルトのフリードリヒに対する約束はそのままロベルトの真意と解することはできず、フリードリヒが自己のドイツ国王承認を目的としてイタリアのゲルフィ党に働きかけたことは、基本的に的はずれな行動であったと言えるだろう。

さて、枢機卿の対立が続き空位が続いたローマ教皇庁に一三一六年八月新たな教皇ヨハネス二十二世が即位した。^④ヨハネス二十二世はナポリ王アンジュー家のロベルト及びフランス国王フィリップ五世の支持のもとに徹底し

たギベリーニ党制圧の政策を開始し、二人の対立ドイツ国王に対しては単に平和的解決を促すだけで一方の確定的な承認を極力回避し、むしろドイツ国王従って神皇ローマ帝国皇帝の空位を理由に、帝国はローマ教皇に服従すべきことを宣言した。⁽⁵⁾ 教皇は先ず先代の皇帝ハインリヒ七世及びハプスブルグ家のフリードリヒがイタリアの支配者たちに認めた皇帝代理権の行使をすべて無効と主張したうえで、一三一七年イタリアにおける帝権の代行者としてロベルトを任命し、ロベルトを皇帝代理と認めないギベリーニ派に対しては破門をもって臨むと同時に、他方ではロンバルディーアとトスカーナに自らの王国を築こうとするナポリのロベルトの野心にも警戒しながら、イタリアにおける教皇権の強化に努めた。この点、教皇の第一の攻撃の対象となったのはヴィスコンティ家のミラーノである。ヴィスコンティ家のマッテオは一三一一年ハインリヒ七世によりイタリアにおける皇帝の総代理を任じられ、グエルフィ派のデルラ・トーレ家をミラーノから排除したあと都市を支配し、その勢力はノヴァラ、ヴェルチエルリ、コモへと及んでいた。教皇は先ず皇帝空位を理由に自ら裁判権を行使し、マッテオに対し不法に監禁されたとされるデルラ・トーレ家の人々の引渡を要求したが、マッテオがこれを拒否したことから、一三一八年一月マッテオを破門しミラーノ市に対し聖務禁止を宣告した。更に、ヴィスコンティ家の勢力増大を怖れた教皇は、枢機卿ベルトラン・デュ・プジェをロンバルディーアの教皇特使として任命し、ミラーノに対しデルラ・トーレ家の再支配とロベルトの皇帝代理権を認めさせようとした。しかし、ヴィスコンティ家を制圧するための教皇軍は非力であり、教皇援助を要請されたフランス国王フィリップ五世も、ナポリ王ロベルトの勢力拡大を望まず、一度はイタリアに降下したフランス軍もヴィスコンティ家との協定によりフランスに帰還した結果、デュ・プジェの防衛力は奪われ、更にヴィスコンティ家がジェーノヴァを攻囲するに及び、ヨハネスは危機的状況を回避するためにハプスブルグ家のフリードリヒに対してデュ・プジェへの軍事的援助を条件にドイツ国王の承認を約束したのである。そこでフリードリヒは弟のハインリヒにイタリア遠征を命令するが、ヴィスコンティ家のマッテオは極めて功妙に

フリードリヒに対し、教皇の権力がミラーノで確立された場合にはイタリアに対する皇帝権の行使が阻害されることを説得し、結局フリードリヒはハインリヒをイタリア遠征から呼び戻すことになる。しかし、マッテオは、ベルトラン・デュ・プジェにより一三二〇年以来開始されていた異端審問の結果一三二二年三月正式に異端を宣告され、あらゆる財産と職務の喪失を宣言された結果、この宗教的断罪に恐怖を感じたミラーノ市民との関係で窮地に追い込まれることになる。更にヴィスコンティ家以外にも、教皇ヨハネス及びその特使ベルトラン・デュ・プジェは、ロベルトに対し皇帝代理権を認めない他の有力なギベリーニ派の支配者、特に、ロベルトの圧制を排しフェラーラの市民の擁護者となったエステ家のライナルドとオピゾに対しローマ教会批判を理由に異端宣告を下し、またヴェローナのカングランデ・デルラ・スカラやマントヴァのパッサリーノ・ボナコルシにも同様の異端宣言が下され、更にギベリーニ派の中心地であったアレツツォの司教グイド・タルラーティも教皇により破門されたが、これらギベリーニ派の支配者は後のルードヴィヒによるイタリア遠征に際し重要な役割を演ずることになる。

さて、ルードヴィヒとフリードリヒの対立をどちらか一方を支持する仕方では裁決する意図がローマ教皇にはなく、むしろ皇帝空位を利用しロベルトを支持しながらイタリアでの教権確立のみを教皇が志向するかぎり、また、フリードリヒを表面上は支持したロベルトの真の意図がイタリアにおけるアンジュー家の統一的支配にあるかぎり、両対立国王がこれら両者の支持を通じて正当なドイツ国王として承認されることは本来不可能なことであった。そこで結局フリードリヒとルードヴィヒは武力により自己の正当性を世に示すべくミュールドルフで対決することになる。一三二〇年、マインツ大司教でルードヴィヒの中心的支持者であったペーター・アスペルト死去の後、マインツの司教座聖堂参事会の選出したバルドウィンを退けてヨハネス二十二世がパプスブルグ家を支持するブヒエツクのマチアスをマインツ大司教に任命し、更に、従来ルードヴィヒを支持してきたアウグスブルグやレーゲンスブルグがハプスブルグ家支持へと態度を変えラインの諸都市が平和協定を結ぶに及び、このような自己に不利な状況

を前にしたルードヴィヒは武力に直接的に訴えることによりフリードリヒを制圧すべきことを決意する。他方フリードリヒ側も、支持獲得のためのハプスブルグ家の財政上の支出は極限に達しており、同じく武力行使による解決を志向するに至り、一三二二年九月両陣営はミュールドルフで一戦を交えることになる。⁽⁸⁾

ミュールドルフの戦いにおいてローマ教皇は一応ハプスブルグ家支持の立場を採り、ハンガリア国王アンジュー家のシャルル・ロベールに対しフリードリヒの援助を要請し、ハプスブルグ家はハインリヒとレオポルトの軍隊をも加えてルードヴィヒ側の軍隊と対決した。この戦いは正当な国王を神の判断で決定する神判と観念され、勝者は神が選んだ正当な国王と見做されたが、この戦いにルードヴィヒは勝利を収めたのである。この結果ルードヴィヒはフリードリヒを捕囚し、またルードヴィヒを援助すべく戦いに参加したルクセンブルグ家のヨハネスはハプスブルグ家のハインリヒを捕囚した。そして戦いに敗れたハプスブルグ家は、アルブレヒト一世の時代から自ら保管していた皇帝権の真正な権標をルードヴィヒに正式に手渡しルードヴィヒを正当な国王として承認すると同時に、従来ルードヴィヒに敵対あるいは態度を留保していたドイツ諸都市は、バンベルグ、ヴュルツブルグ、マインツなど司教が強力な世俗的権力をもつ都市は別として、その多くがルードヴィヒに服従することになり、特にニュルンベルグとフランクフルト・アム・マインは以後ルードヴィヒに対し強力な支持を与えることになる。

ルードヴィヒはミュールドルフでの勝利の後ヴィテルスバッハ家の勢力拡大を目的として、北海沿岸地域の支配者ホラントのヴィルヘルム三世の娘マルガレーテと結婚しヴィルヘルムを自己の味方にひき入れ、更にアスカニア家の辺境伯ヴォルデマール及びその後継者ハインリヒ二世が死去した後混乱の続いていたブランデンブルグを一三二三年ニュルンベルグでの帝国議会において自己の領土とし、これを息子のルードヴィヒに与え、ヘンネベルグ伯ベルトルドをその保護者に任命した。しかし、ミュールドルフでのルードヴィヒの勝利とその後の勢力拡大はルクセンブルグ家にとり好ましい事態でなかったことは言うまでもない。特に、従来ルードヴィヒを支持してきたルク

センブルグ家のトリニア大司教バルドヴィンはルードヴィヒ支持の政策を変え、以後ハプスブルグ家支持のケルン大司教ハインリヒに接近し、更にまた、ルードヴィヒの中部北部ドイツでの権力拡大を前にしてルクセンブルグ家のボヘミア国王ヨハネスも、ミュールドルフの戦いではルードヴィヒ勝利の一翼を担ったにもかかわらず、ブランデンブルグ及びマイセンへとルードヴィヒが支配権を拡大するに及び、ヨハネスの妹マリアとフランス国王シャルル四世との結婚、及び未だ幼少の息子ヴェンツェル（後の皇帝カール四世）とヴァロア伯シャルルの娘ブランカとの結婚を通じて、フランス王家に接近した。また他方、ハプスブルグ家の公爵レオポルトも間もなくストラスブルグ、コルマー、フライブルグといった都市の支持を得てアルザスで勢力を回復し、またボヘミア国王ヨハネスがミュールドルフで捕囚したハプスブルグ家のハインリヒもフランス国王の助言により解放され、ドイツの諸選帝侯は次第に反ルードヴィヒの態度を強化していく。

さて、ルードヴィヒは神判であるミュールドルフの勝利を根拠として、教皇に対しドイツ国王承認と皇帝戴冠を要請したが、教皇はミュールドルフの戦いで国王選挙をめぐる対立が終結したとは考えず、ルードヴィヒを国王として承認することを拒否した。むしろこの後、ルードヴィヒと教皇の関係はミラーノ問題をめぐって次第に悪化していく。既述のごとく、ヴィスコンティ家のマッテオに対する教皇の異端宣告及びミラーノに対する聖務禁止令はミラーノ市民を恐怖に陥し入れていたが、この後市民は教会の敵マッテオの支配権を否定してミラーノ共和国の成立を宣言する一方、教皇特使ベルトラン・デュ・プジェの率いる教皇軍はミラーノを攻囲しつつあった。またこの間、マッテオは支配権を息子のガレアツォに譲った後一三二二年六月に死去し、ヴィスコンティ家は教皇軍に対し降伏寸前の状況にあった。しかしこのときガレアツォはルードヴィヒに援助を要請したのである。父マッテオ・ヴィスコンティはかつて皇帝ハインリヒ七世によりイタリアでの皇帝総代理に任命され、従ってミラーノは皇帝の都市であり、ミュールドルフで勝利したルードヴィヒがドイツの正当な国王であれば、ミラーノを擁護するこ

とは国王の義務であるとガレアツツォは考えたのである。この要請に依えてルードヴィヒは、教皇による皇帝承認が未だ得られずともイタリアにおいて帝権を行使することを正当と考え、ガレアツツォを擁護するべく一三二三年三月にマルシュテッテン伯のベルトルドをロンバルディーア、トスカーナ及びマルケの皇帝総代理として派遣し、更にグライスバッハ伯ベルトルド及びトルーエンディングンのフリードリヒの二人にミラーノ問題に関する全権を与えた。⁽¹⁰⁾ 先ずこれら三人の皇帝特使はピアチェンツァでベルトラン・デュ・プジェに会いミラーノ攻囲の解除を要求するが、デュ・プジェがこれを拒否したことから、皇帝特使は次にマントヴァのパッサリーノとヴェローナのカングランデ・デルラ・スカラと会見し、彼らが嘗てハインリヒ七世に対して行った忠誠の誓約を想起させることにより、ローマ教会への服従を決意していた彼らを反意させ、教皇軍に対抗してルードヴィヒを援助するよう要請した。この結果、七月にはギベリーニ派の同盟が結成され、ギベリーニ派の軍隊はミラーノ攻囲を解き教皇軍は退却したのである。以後ルードヴィヒは、ヴェローナのカングランデ、マントヴァのパッサリーノ、フェラーラのエステ家を中心としたギベリーニ派との同盟を通じて教皇に対抗することになる。

これに対しヨハネス二十二世は一三二三年十月八日にルードヴィヒに対する最初の告訴 (processus) をアヴィニヨンの司教座聖堂の門戸に掲示した。⁽¹¹⁾ その主な内容としては、ドイツ選帝侯の国王選挙に関しては教皇が審査及び承認否認の権限を有し、教皇が承認を与えるまでは、選挙された者は国王の候補者にすぎず、皇帝でないことはもとよりドイツ国王でもないこと、ドイツ国王（従って神聖ローマ帝国皇帝）位が空位の場合教皇自身が王権（そして皇帝権）を行使しうることに、そしてルードヴィヒは王権を不当に行使し、ドイツ及びイタリアの聖職者や世俗支配者から忠誠の誓約を不当に受け、しかも異端者たるヴィスコンティ家を不当に支持したことなどが主張されており、更にルードヴィヒは三ヶ月以内に帝権を放棄し、自ら国王として行った行為を取消すよう命令され、また彼に忠誠の誓約を行った者もこれを取り消すよう命令された。教皇によるこの告訴の背後には、当時アヴィニオンに滞

在していたナポリ王ロベルト、フランス国王シャルル四世、それにハプスブルグ家との和解を目指すルクセンブルグ家の働きかけがあったと考えられるが、この告訴に対してルードヴィヒはアヴィニオンに特使を送り告訴の確認と三ヶ月の期限の猶予を願い出る一方で、⁽¹²⁾十二月十八日ニュルンベルグで訴書 (appellatio) を公布し、自己の立場を擁護した。⁽¹³⁾この訴書でルードヴィヒは、選帝侯によりローマ人民の王として選ばれ、しかるべき場所 (アーヒェン) で戴冠した者が国王の権限を正式に有することは遠い過去よりドイツの法とされており、それ故ルードヴィヒはたとえ教皇の承認が得られずとも正式の国王であること、十年の間ルードヴィヒは如何なる抵抗も受けることなく帝国を統治しており教皇による皇帝戴冠なくして正式のローマ皇帝権を有し、それ故帝権は空位でないこと、また、ヴィスコンティ家に異端宣告が下されていたことをルードヴィヒは知らず、異端を擁護する意図のなかったこと、更に教皇ヨハネス自身も告解の秘密義務に違反したフランシスコ修道会を放置する誤りを犯していたことを主張し、更に公会議の召集によりあらゆる非難に対し自己を弁護する用意のあることを公言した。ルードヴィヒはこの訴書に続いて一三二四年一月五日フランクフルトで第一の訴書とほぼ同一の内容の訴書を公けにするが、⁽¹⁴⁾この訴書には告解の秘密に関する争点は削除されている。

しかしこれらの訴書にもかかわらず、ヨハネス二十二世は、ルードヴィヒの国王選挙が選帝侯の対立のなかで強行されたこと、それ故少くとも教皇の承認を得るべきことを繰り返し、召喚の猶予を二ヶ月認めただけで、⁽¹⁵⁾ついに一三二四年三月自己の命令に服従しないルードヴィヒに破門を宣告した。⁽¹⁶⁾この破門の理由としては、教皇によりロベルトが皇帝代理に任命されたにもかかわらずルードヴィヒはイタリアで帝権を不当に行使したこと、及び異端者ヴィスコンティ家を支持したことが挙げられており、更に、以後ルードヴィヒを正当な国王として認め続ける聖職者は破門されること、そして、従来教皇の命令に服従しなかった都市や諸侯は今回は寛恕されるものの、今後ルードヴィヒを支持し続ければ破門され、皇帝から授与された封土の没収と聖務禁止が科せられることなどが宣言され

ている。ルードヴィヒに對するこの破門宣言ではヨハネスはドイツ選帝侯の立場を配慮してか、国王選挙の法的効力については何ら言及していない。むしろヨハネスはこの破門宣告を、この宣告と同時になされたロンバルディアのギベリーニ派支配者、特にフェラーラのエステ家やアレツツォ司教グイドへの異端宣告と意識的に連結させ、断罪の対象をドイツ国王選挙の効力から北イタリアのギベリーニ党の異端へと移すことにより、選帝侯に責任が及ばないよう配慮したとも思われる。さて、このヨハネスの破門に對し一三二四年五月にルードヴィヒはザクセンハウゼンで新たな訴書を公けにするが、⁽¹⁷⁾この訴書は明らかにロンバルディアのギベリーニ派の手になるものと考えられる。この訴書のなかでルードヴィヒは自己の国王選出の正当性を再び主張した後、今回は明瞭にヨハネス個人を攻撃し、ヨハネスはドイツと帝国の敵であり、教会をシスマ化せんとする者、十字軍による聖地解放をなおざりにしフランススコ派の清貧を否定する異端者であり、従つて真正の教皇ではなく単に自らを教皇と称している者にすぎない、と主張した。ニュルンベルクの訴書ではフランススコ会を批判したルードヴィヒが、ここではフランススコ派の清貧をヨハネスに對し擁護していることは興味深く、この点でフランススコ派とルードヴィヒとの接触が既に存在し、ザクセンハウゼンの訴書にフランススコ会士が参加したとも想定されうるが、逆に、ルードヴィヒがこの訴書の具体的内容をどの程度了解していたかは明らかでなく、後にルードヴィヒがローマ教皇庁との和解を求めたときに、この訴書での教皇攻撃の部分がルードヴィヒ自身ではなく書記長ウルリヒ・ヴィルドニスの手になる旨の弁解を行っており、どこまでがルードヴィヒ自らの主張かは判断し難い。⁽¹⁸⁾むしろ、フランススコ派の清貧論争への言及はルードヴィヒの関知するところではなく、この訴書の起草者が教皇に對する批判をより強化する意図で、ロンバルディアのギベリーニ派の主張と同時に、清貧論争をめぐるフランススコ派の教皇攻撃をも付加することによりフランススコ派を自己の陣營に引き入れようとしたことも充分考えられる。しかしいずれにしても、この訴書はドイツ語訳されすべての帝国直屬都市で読み上げられたものの公式には教皇へ送付されることはなく、ヨ

ハネスは上記の破門宣告の後、更に一三二四年七月の告訴においてルードヴィヒに国王としてのあらゆる権限を否定し、十月一日までにアヴィニオンへ出頭するよう命令するとともに、ルードヴィヒを支持する者に対しては破門と聖務禁止をもって臨み、ルードヴィヒの断罪をアヴィニオンからヨーロッパの各地へと告知した。⁽¹⁹⁾以後、ドイツの都市や諸侯及び聖職者は、国王への服従を禁止するローマ教皇に従うべきか、それとも当の教皇を異端者と宣言したドイツ国王に従うべきか、いずれかの選択を迫られることになる。

しかし、ルードヴィヒに対する真の脅威は、当初よりローマ皇帝選出には消極的であつたローマ教皇ではなく、既に述べたように、ミュールドルフの戦い以後ルードヴィヒの勢力拡大に対し警戒体制を固め相互に同盟を結ぶことによりヴィテルスバッハ家に対抗するに至つたハプスブルグ家、ルクセンブルグ家及びフランス王家であつた。このような状況を前にしてルードヴィヒはハプスブルグ家とルクセンブルグ家との同盟を阻止すべく、北部ドイツへの進行を中止してまでもレオポルトとの和解を試み一時的な停戦がとりきめられ、既述の如くレオポルトはルードヴィヒに皇帝の権標を公式に手渡したものの、両者の和解は結局不成功に終り、むしろレオポルトは一三二四年以来ローマ教皇を仲介としてフランス国王との交渉を開始する。この時期におけるハプスブルグ家とルクセンブルグ家及びフランス王家の政治的な駆引の焦点は、ルードヴィヒを排して誰をドイツ国王そして神聖ローマ帝国皇帝に擁立すべきかという問題であり、一方でボヘミアのヨハネスはフランス国王との交渉を通じて自らドイツ国王となる野心を抱き、他方ハプスブルグ家のレオポルトとフランス国王との交渉の焦点もドイツ国王選出にあつたが、一三二四年夏のバルⅡシユールⅡオーブでのレオポルトとシャルル四世との会見では、シャルルが選帝侯による選挙、あるいは選挙によらずして直接教皇の承認によってドイツ国王（そして神聖ローマ帝国皇帝）となり、レオポルトがドイツにおける皇帝代理となる提案が論議され、更に両者はともに協力してドイツ及びイタリアにおいてルードヴィヒと戦うこと、そしてハプスブルグ家が失つたスイスに対する支配権を奪回する際にフランスが財政的援

助を与えることが約束された。しかし、この協定はフリードリヒの国王としての権利の否定を意味し、従ってレオポルトの兄弟たちはこれを承認せず協定は失敗に終わったが、以上のような情勢においてルードヴィヒは、未だ囚われの状態に置かれたハプスブルグ家のフリードリヒを利用し、これと和解し協力関係を結ぶことにより窮地をまぬがれ、後のイタリア遠征のために有利な状況をドイツにおいて形成しようと努力することになる。

それ故フリードリヒとルードヴィヒは一三二五年三月トラウスニッツでの和解において、フリードリヒを釈放するかわりにその王権放棄を約束させ、更にフリードリヒのハプスブルグ家の兄弟たちをルードヴィヒの封臣とすることが協定され、更にはフリードリヒの娘アンナとルードヴィヒの息子ステファンとの婚約が計画された。しかし、この和解はフリードリヒの努力にもかかわらず、当然のことながら兄レオポルトや教皇ヨハネスの認めるところとはならず、フリードリヒはルードヴィヒに対し、ウィーンでの兄弟との交渉の決裂後ミュンヘンに帰還するという誓約をしていたが、教皇はフリードリヒをこの誓約から解放しルードヴィヒとの和解を禁止した。これに対し、結局フリードリヒは教皇の指示には従うことなく、ルードヴィヒと一三二五年九月ミュンヘンにおいて両者ともにドイツ国王として共同統治を行なうことを約すに至り、⁽²⁰⁾ ついにレオポルトもこの協定には賛成することになる。しかしミュンヘンでのこの協定は教皇ヨハネスや他の選帝侯、特にボヘミア王ヨハネスの支持を受けることはなかった。そこで更にルードヴィヒは一三二六年一月ウルムにおいて、もしフリードリヒが六ヶ月以内に教皇の国王承認獲得に成功する場合には自ら王権を放棄することを宣言したが、⁽²¹⁾ これもフランス国王シャルル四世の皇帝擁立を志向しフリードリヒへの信頼を既に失っていたローマ教皇により承認されることはなく、結局ミュンヘン協定の共同統治が事実上存続することになる。しかし、このようにフランス・ローマ教皇・ルクセンブルグ家の共謀により自らの運命が左右されていることを自覚し、ミュンヘン協定やウルム協定を通じハプスブルグ家の兄弟の支持を得て今や帝国のために確固としてルードヴィヒと手を結ぶに至ったフリードリヒも、一三二六年のレオポルトの死、

そして一三二七年のハインリヒの死によるハプスブルグ家の弱体化とともに力を失ない、自らも一三三〇年に死去する。それ故結局のところ、ルードヴィヒのドイツ国王としての法的権限の正当性は明確な決着がつくことなく、ドイツの諸勢力はルードヴィヒと教皇ヨハネスの二つの陣営へと分断されたままローマでの皇帝戴冠を目的とするイタリア遠征がルードヴィヒにより決行されていく。

一三二四年前後からイタリアのギベリーニ党はルードヴィヒに対しイタリア降下を要請していたが、ルードヴィヒはこの要請を受け容れ、ギベリーニ派のシチリア国王フェデリーコ三世との間にも同盟を結びイタリア遠征を準備した。既に述べたハプスブルグ家のフリードリヒとのミュンヘン協約も、ルードヴィヒのイタリア遠征を前提とした協約である。さて、この時期のミュンヘンの宮廷には、ルードヴィヒの政治的主張の理論的基礎となるような思想を展開した一人の思想家が現われていた。パードヴァのマルシウスである。⁽²⁵⁾既に当時からルードヴィヒのミュンヘンの宮廷にはジャン・ド・ジャンダン、タルハイムのハインリヒ、ウベルチーノ・ダ・カサレなど多かれ少なかれ異端的な傾向をもつ幾人かの思想家が庇護を求めて集まっていたが、ルードヴィヒの行動に直接的な影響を与えたのはマルシリウスであり、彼の一三二六年に公けにされた「平和の擁護者」(Defensor pacis)はローマでの戴冠及び対立教皇擁立へと至るルードヴィヒのイタリア遠征に決定的な影響を与えることになる。マルシリウスは医学の研究から出発し一三一一年パリで「magister」の資格を取得し一三二二年から十三年間「rector」をつとめていたが、一三二〇年以降イタリアのギベリーニ派を支持するようになり、ヴェローナのカングランデやミラーノのヴィスコンティ家の使節としてフランス国王シャルル四世のもとに赴くこともあった。⁽²⁸⁾しかし一三二六年に公刊された「平和の擁護者」に含まれる異端的思想の故に、マルシリウスは教皇と密接な関係にあったフランスからジャン・ド・ジャンダンとともに逃亡し、ルードヴィヒの庇護を求めてミュンヘンの宮廷に滞在していたのである。ミュンヘンでのマルシリウスはルードヴィヒの侍医であり、従って後者が「平和の擁護者」の理論的内容について

マルシリウスから教えを受けていたことは疑いがない。以後、マルシリウスはジャン・ド・ジャンダンとともにルードヴィヒのイタリア遠征に同行し、影響力ある助言者として活躍することになる。

このローマ遠征は、先ず一三二七年トレントにおけるルードヴィヒとイタリアのギベリーニ党領主たちとの集会から始まる。⁽²⁹⁾トレントでの集会の主たる目的は、ルードヴィヒのイタリア遠征にとって重要な意義をもつ二人の領主ケルテンのハインリヒとカングランデ・デルラ・スカラの対立を調停し、両者をともにルードヴィヒの支持者に加える点にあった。⁽³⁰⁾ケルテンのハインリヒは、ハプスブルグ家のボヘミア国王ルドルフ三世が一三〇七年に死去した後、自らボヘミア国王の継承権を主張していたが、ルクセンブルグ家がボヘミアを支配するに及びボヘミアからの退却を強いられ、ハプスブルグ家のフリードリヒはハインリヒのボヘミアへの野心を断ち切らせるためにパードヴァの皇帝代理権を与えたが、ヴェネチアからドイツへの通商上の要地であるパードヴァへの支配権をカングランデも要求したことから、両者の対立が生じていた。しかし、ハインリヒの支配するアルプスの領域はイタリア南下の際にルードヴィヒが通過しなければならない地域であり、従って、ハインリヒの支持を獲得することはルードヴィヒにとり重要である一方、イタリアのギベリーニ派の中心的人物の一人カングランデの支持もイタリア遠征に不可欠な条件であった。当初ルードヴィヒはハインリヒを支持する立場をとり、これを不満としたカングランデは教皇派に接近しようとするが、結局エステ家のオピゾの仲介によりトレントでのギベリーニ派の集会に参加することになる。トレント集会に参加したギベリーニ派にはカングランデ以外にフェラーラのエステ家のオピゾ、ミラノのヴィスコンティ家のマルコとアゾ、マントヴァのパッサリーノ・ボナコルシ、教皇により破門されたアレツツオ司教グイド・タルラーティ、シチリア国王フェデリーコの使者、ギリシャ皇帝の使者、ピサその他ギベリーニ派の諸都市の代表者、そして、ルードヴィヒとフリードリヒの闘争に際して当初は後者を支持したが、その後ルードヴィヒにより新たにルッカの皇帝代理に任命され、更にフィレンツェからピストイアを奪いこれを皇帝代理とし

て支配していたカストルツォ・カストラカーニの使者などである。この集会においてルードヴィヒはミラーノでイタリアの王として戴冠した後ローマで皇帝として戴冠することを約し、更に、ギベリーニ派の領主たちに対し各自の支配領域（エステ家のフェラーラ、カングランデのヴェローナ及びヴィツェンツァ、パッサリーノのマントヴァ及びモデナなど）での帝国法上正式な皇帝代理権の授与を約した一方、これらギベリーニ派の領主や諸都市はルードヴィヒに対し財政的援助を約した。そして集会の終結後、ルードヴィヒは当初予定したニュルンベルグでの帝国議会には出席することなく、自己の代理としてヘンネベルグのベルトルトをニュルンベルグに派遣し、ドイツ諸侯に対してイタリア遠征の支持を要請したのである。

このようなギベリーニ派の結束に対抗してゲルフィ派の諸都市（フィレンツェ、パルマ、ボローニャなど）はロベルトの息子カラブリアのカルロの指揮のもと、ルードヴィヒのイタリア遠征を阻止すべく結束するが、トレントの集会の後、ルードヴィヒはベルガモ、コモ、モンツァを経て予定どおりミラーノに到着し、五月三十一日聖霊降臨節の日曜日に聖アンブロジオ教会で、嘗てハインリヒ七世のために創られイタリアの王権を象徴する「鉄の王冠」をアレツツォ司教グイド・タルラーティ及びブレッシア司教の手により授与された。⁽³¹⁾ この後、ギベリーニの領主たちはイタリアの王たるルードヴィヒに忠誠を誓約し、ルードヴィヒは新たに彼らに対し従来からの支配権を承認したが、⁽³²⁾ やがてはヴィスコンティ家のガレアツォと衝突することになる。この衝突の理由は必ずしも明確ではないが、⁽³³⁾ ガレアツォがトレントの集会で約束した経済的援助を拒否したことが主たる理由と思われる。ルードヴィヒはガレアツォを投獄し、ミラーノにおけるヴィスコンティ家の権限をすべて否定して、皇帝代理モンフォルトのヴィルヘルム及びミラーノにおけるその更なる代理ブランキヌス・ブルサマーニの統治のもと、都市の支配権を一名のポデスタと二十四名の市民による議会に委ねたのである。従来よりガレアツォの圧政に不満を抱いていたミラーノの貴族と市民はルードヴィヒがヴィスコンティ家に対してとった行動を歓喜をもって支持したが、ロ

ンバルディーアの他の領主たちはルードヴィヒのこのような態度に対し警戒の念を抱き始め、ルードヴィヒが自己の領土で強力にならないよう配慮しつつ協力関係を維持していくことになる。おそらくルードヴィヒ自身も、ミラーノでの経験を通じて、イタリア諸都市の内政上の紛争から生ずる問題、そして自己の同盟者が必ずしも信頼できない事実を既に自覚し始めたと思われる。

さて、ミラーノにおいて更にシチリア国王フェデリーコとの間で教皇ヨハネスに対抗する協定を結んだ後、八月上旬にルードヴィヒはミラーノを離れ、クレモーナ、ボルゴ・サン・ドンニノ、パルマなどを経て、ポントレモリーでカストルツォ・カストラカーニと合流したあとピサへと向う。ルードヴィヒのイタリア遠征、特にミラーノでの戴冠はイタリア諸都市に大きな波紋を投げかけ、各都市はルードヴィヒを支持するか否かについて選択を迫られていた。ミラーノに続く重要な滞在地ピサはギベリーニとゲルフィが共存し、特にルードヴィヒを全面的に拒否する態度は示さなかったが、多大の財政的援助を要求されることを恐れ、またルードヴィヒの有力な支持者でルッカの領主カストルツォが従来よりピサ占領を試みピサ市民と敵対していたことから、市民は教皇とロベルト及びフィレンツェとの協定を通じてルードヴィヒに対し当初は門戸を閉ざした。その後、ピサは門戸を開かず代償として財政的援助の提供をルードヴィヒに申し出るが、ルードヴィヒはこれを拒否し更にカストルツォがピサの使者を捕囚したことからピサは防衛体制を強化するが、間もなくカストルツォはピサを完全に包囲しピサ周辺の城を占領した。しかしこの間、ピサの支配者層、とくに反ルードヴィヒの立場をとるピサ大司教シモン・デ・サルタレルリと和解を主張する人々との間で意見の対立が生じ、ついに十月ピサは、都市の政治的自治の維持とカストルツォのピサ滞在の禁止を条件に都市を明け渡し、サルタレルリがピサを逃亡した後ルードヴィヒは大司教の宮殿に居を構えることになる。しかし、上記の条件も結局はピサ市民自らにより無視され、ルードヴィヒは都市の支配権を認められカストルツォもピサ滞在を許されるに至る⁽³⁵⁾。ピサ滞在の後、ルードヴィヒはポデスタとして任命し

ていたバヴェリウス・デ・サリングウエラを更にピサにおける皇帝代理として置き、ルッカに赴く。ルッカの領主カストルツォはルードヴィヒのイタリア遠征の最大の協力者であり、ローマ行きに必要な莫大な資金を自由に調達し得る人物であった。ルードヴィヒはルッカ、ルーニ、ピストイアなどをカストルツォの世襲的公爵領として認め、更にはカストルツォを神聖ローマ帝国の旗手に任命した。その後、ピサに戻ったルードヴィヒは十二月中旬にピサを去り、カラブリア公爵のカルロの指揮する教皇派にも防害されることなく一月にヴィテルボに到着する。

さて、以上のようなルードヴィヒのイタリア進軍を前にして教皇ヨハネスは一三二七年四月の一連の告訴において、異端の擁護者ルードヴィヒからバイエルン公爵領を没収し、ローマ及びロベルトの王国への侵入を禁止し、そして更に、十月二十三日に、キリストの清貧に関して異端思想を支持したことやマルシリウス及びジャン・ド・ジヤンダンの庇護及び聖務禁止違反などを理由としてルードヴィヒに異端の宣告を下し、ルードヴィヒの封臣に対しては誓約義務の免除を認めた。⁽³⁸⁾ 他方、ルードヴィヒのイタリア遠征の目的地ローマでは、ルードヴィヒのローマ入城に対して如何なる態度をとるべきかにつき有力者の間で激しい対立が生じていた。⁽³⁹⁾ 嘗て教皇ヨハネスは即位の後一三一七年にナポリのロベルトをローマの元老院議員及びカピターノ・デル・ポポロに任命し、ロベルトは更に自己の代理をローマに置いてこれを支配していた。ルードヴィヒのイタリア遠征が確実となったとき、ローマ市民は教皇ヨハネスに対し教皇庁のローマ帰還を要求したが、これを拒否したヨハネスの態度に立腹したローマ市民はオルシーニ家及びコロンナ家の貴族及びロベルトの一派を追放し、コロンナ家で唯一人ギベリーニ派に属していたシャルラ・コロンナの指揮のもとに五十二名の市民代表による民主制をひくことになる。その後、ルードヴィヒのミラーノでの戴冠がローマに伝わると、ローマの新政府はヨハネス二十二世に対して再度教皇庁のローマ帰還を要請し、教皇がこれに従わない場合はルードヴィヒをローマに迎え入れる旨を伝えたが、これに対しヨハネスはローマ帰還を時期尚早として拒絶してローマ市民による貴族やロベルトの追放を非難し、他方、ロベルト弟のジョヴァ

ンニをローマのカピターノに任命しローマ占領を試みるに及び、ついにローマ市民は早急にルードヴィヒを迎い入れる決心をするに至った。

一三二八年一月七日、ルードヴィヒはローマ市民の歓呼のもと都市に迎え入れられ、先ずサン・ピエトロ宮殿にとどまった後、サンタ・マリーア・マッジョーレ教会に居を定めた。⁽⁴⁰⁾ルードヴィヒは皇帝戴冠の準備段階としてカンピドーリオで集会を開き、コルシカのアレリア司教を通じて皇帝戴冠の意図を表明したが、ローマ市民は圧倒的喝采のもとにこれを受け容れ、ルードヴィヒを元老院議員かつカピターノ・デル・ポポロに任命し、サン・ピエトロでの戴冠式を次の日曜日一月十七日に定めた。教皇派の多くの聖職者たちは既にローマから逃亡し、サン・ピエトロの司教座聖堂参事会員の一人はキリスト受難の聖遺物である「聖ヴェロニカの帛」を携えてローマを去っていた。そこで戴冠式の当日、教皇により破門されていた前述のアレリア司教及びカステルロ司教の二人が聖別と塗油をとり行ない、また従来より皇帝戴冠に際して重要な役割を果たしていたラテラン宮中伯については、前任者の逃亡の故にカストルツォがその任務を担当することになり、更にローマ市民の代表としてシアルラ・コロナがルードヴィヒに戴冠した。ローマ市民はこのような皇帝戴冠によって教皇は不在であってもローマが世界の中心であることを誇示し、また、ローマ市民の代表シアルラ・コロナによる皇帝戴冠は、皇帝権の根拠がローマ教皇ではなくローマ市民の選挙にあるとするパードヴァのマルシリウス思想を具体的に表現する結果となった。確かに、ルードヴィヒの皇帝戴冠はシャルルマーニュ以来の長い伝統に違背し、従来は武力による強制を通じてであれ反立教皇によるものであれ、常に教皇によって戴冠がなされてきたことを考えれば、教皇を介することなくローマ市民の代表が直接的に皇帝戴冠を実行したことは当時の多くの人々の間に驚きと不安を呼び起したにちがいない。⁽⁴¹⁾戴冠のあとルードヴィヒは三つの勅命を發布し、翌日にカルトルツォはローマ元老院議員そしてローマにおける皇帝代理に任命され、カストルツォの息子アリーゴとシアルラ・コロナの娘アレクシアの婚姻が結ばれた後、

更にルードヴィヒは実子ルードヴィヒにブランデンブルグ辺境伯領を封土として再度正式に授与した。

ローマでの戴冠へと至るルードヴィヒの以上の行動がアヴィニョンに大きな衝撃を与えたことは言うまでもない。このことは、既に一三二七年十二月にローマ教皇がイタリアの教皇派貴族の支持を得るためにナポリ大司教アンニバルド・カエターニ・デ・チェッカーノ、及びローマより追放されたマッテオ・オルシーニとジョヴァンニ・コロナの三名を新たに枢機卿として任命したことに現われており、更にヨハネス二十二世は異端者ルードヴィヒに対する十字軍を唱え、ナポリのロベルトやボローニャ、フィレンツェ、ペルージャ、シエーナの諸都市と同盟しルードヴィヒとの戦いを準備する一方、一三二八年二月以降一連の教令により、ルードヴィヒのミラーノでの戴冠、ピサの奪取、ミラーノやフェラーラの異端者たちとの結合を断罪し、更に、ローマに侵入しルードヴィヒ自ら元老院議員となり皇帝として戴冠したこと、カストルツォをラテラン宮中伯及び元老院議員に任命したことなどをすべて無効と宣言したうえ、皇帝戴冠の儀式に参加した聖職者をすべて破門し、ローマ市民に対して七月までにルードヴィヒを追放すべきことを宣言した。そしてヨハネスは、空位のドイツ国王の新たな選挙へと向けてドイツ諸侯に働きかけることになる。

これに対しルードヴィヒは、先ず四月十四日にサン・ピエトロ広場で人民集会を開き三つの勅令を發布し、自己がキリスト教世界の首長であり、神と皇帝の権力に違背した者は異端であり死罪に処せられること、⁽⁴⁴⁾皇帝の統治年の記載されていない公正証書は無効であること、帝国及びローマ市民への反抗者は財産を没収されることなどを⁽⁴⁵⁾宣言し、この後直ちにヨハネス二十二世の廃位を宣言する。⁽⁴⁶⁾四月十八日に発布された教皇廃位のこの勅令は、アヴィニョンに滞在する教皇に対しローマの下層市民たちが強く抱いていた反感に由来し、ルードヴィヒ自身の発意によるものではないとも考えられるが、この勅令の作成にはマルシリウスの影響が色濃くみられ、今やローマ帝国皇帝となり自らをローマ教会の擁護者と宣言したルードヴィヒに対しマルシリウスがヨハネスの廃位と新たな教皇の

擁立を勧めたことも充分に考えられる。四月十八日の集会におけるヨハネスの廃位宣言では、先ずアウグスチヌス修道会士ニッコラ・デイ・ファツブリアーノが、「自ら教皇ヨハネス二十二世と名乗る司祭ジャック・ドウ・カオルを擁護しようと欲する者在りや否や」と三たび問い、これに答える者の居ないことを確認したあと、一人の聖職者がルードヴィヒによるヨハネス廃位の宣言を読みあげた。この宣言においてルードヴィヒは、教会の擁護者たる皇帝はローマ人民と聖なる教会の要請に応じて教会の敵によって破壊された秩序を再建すべきこと、ヨハネスはイタリアを戦場としてサラセン人との戦いをおこたつたこと、世俗権力は教皇権から独立でありキリスト自ら世俗権力に服従したにもかかわらず世俗事項に介入し皇帝権を侮辱したこと、キリストの清貧に關し異端を唱えたこと⁽⁴⁷⁾、キリストの意志に違背してローマ市を離れアヴィニヨンに滞在していること、異教徒であるポーランド国王やシレジア、ポメラニア等の貴族に対し辺境伯領に侵入するように挑発し一三二六年にポーランドとリトアニアの軍隊をしてブランデンブルグを荒廃させしめたこと、司教座聖堂参事会の権利を侵害したことなどを根拠として、ヨハネスを「地上から平和を奪い、人々が互いに殺しあうようにすべく出て立つ赤い馬に乗つた」黙示録の偽予言者アンチ・キリストとして断罪したのである。更にルードヴィヒは二十三日の新たな勅令により、⁽⁴⁸⁾ローマ教皇にはただ三ヶ月間のみローマ市外での滞在が許されること、以後ローマに教皇庁が置かれるべきこと、そして教皇はローマで選挙されないかぎり真の教皇ではないことを宣言した。さて、ヨハネス二十二世廃位宣言の後、新教皇の選出についてルードヴィヒはこれをマルシリウスが主宰しシアルラ・コロンナなどの参加する委員会に委ねたが、間もなくフランススコ修道会出身のコルヴァラのピエートロが新教皇に推薦された。五月十二日、キリスト昇天祭の日曜日にサン・ピエートロ広場に集つたローマ市民に対し、ヴェネチア大司教が修道士コルヴァラのピエートロを教皇として欲するか否かを三たび問い、ローマ市民がこれに対し「然り」と三たび答えたあと、市民によるこの教皇選出は直ちに皇帝の勅令で是認され、皇帝からピエートロに「漁夫の指輪」及び祭服が渡されることにより、ここに教

皇ニコラウス五世が誕生した。⁽⁴⁹⁾ 従ってニコラウス五世は枢機卿とは無関係に、形式上はローマ市民と皇帝により選出され、この意味でマルシリウスの思想はニコラウス五世選出においても具体的に現実化されたと言えるだろう。しかし、コルヴァラのピエートロはアヴィニョンのヨハネス二十二世に政治的な意味で比肩しうる人物ではなく、単にフランススコ修道会の上位者の命令への服従義務から教皇職を引き受けたにすぎず、ルードヴィヒの単なる傀儡としてその後のイタリアにおけるルードヴィヒの軍事的弱体化とともに自らも不幸な運命を辿っていくことになる。さて、ニコラウス五世選挙の後、七名の枢機卿が選出され、⁽⁵⁰⁾ 更にルードヴィヒはニコラウス五世の手により新めて正當な皇帝として戴冠した。⁽⁵¹⁾ しかし以後、ルードヴィヒがナポリ王ロベルトとの戦いを準備する時点に至って、皇帝の軍隊は急激に弱体化してくる。先ず、ルードヴィヒの財政上軍事上の最大の支えであったカストルツォは、ピストイアがフィレンツェ人により占領奪取されるに及びローマを離れ、また期待されたシチリアのフェデリーコの援助軍は未だ到着しなかった。更にはルードヴィヒの陣営の内部において低地ドイツ出身と上部ドイツ出身の軍隊の間に新教皇支持をめぐる対立が生じて前者は新教皇ニコラウス五世の承認を拒否し、これに加えてたび重なるシロッコにより軍隊の間に熱病が蔓延したことなどの原因が重なり、結局ルードヴィヒはナポリの攻撃を中止せざるを得なくなる。また他方、ロベルトを中心とする教皇側の勢力も強く、カラブリアのカルロはローマの東に位置するアクイラ及び戦術的に重要なスポレートを支配し、またフィレンツェ、ペルージャ、シエーナなど教皇派の諸都市は協力してロベルトを支援する一方、ロベルト自身は自らの王国の要塞の防備を強固にしつつルードヴィヒの軍隊に対し再三攻撃をしかけたうえ、陸路と海路の食料輸送を妨害することによってローマ市民を食料不足で狼狽させ反ルードヴィヒの感情を煽ることにより、次第にローマ市民をルードヴィヒから引き離そうと試み、ついにはテヴェレ川を上流へと自己の軍隊を進軍させてきた。⁽⁵²⁾ しかも、資金不足の故に充分な報酬を支払われないことから軍隊の間にひろまった不満をおさえるために、ルードヴィヒがローマ市民に重い税を取り立てたが故に市民自体も

次第に強い反感を抱きはじめていた。それでついに八月、ルードヴィヒはロベルトへの攻撃を断念し、ニコラウス五世とともにローマ市民の激しい罵言と投石をあびながら屈辱的にもローマを出発することになる。⁽⁵³⁾そして、ルードヴィヒがローマを離れるや否やベルトルド・オルシーニ、ステーフアノ・コロンナ及びナポレオン・オルシーニはその軍隊とともに移り気なローマ市民の歓迎を受けながら帰還し、前二者は元老院議員に任命され、教皇ヨハネスのトスカナ枢機卿特使ジョヴァンニ・オルシーニはローマでのルードヴィヒの行為をすべて無効と宣言した上その勅令をすべて焼却し、自らローマを教皇特使として支配するに至った。

他方、ルードヴィヒはローマを離れたあとヴィテルボに直行し、トーディに滞在した後、シチリアからようやくルードヴィヒ援助のために北上してきたフェデリーコの息子ペテロとコルネート・タルクイニアで落ち合い、更にその後到着したシチリアの軍隊とともにトスカナへと向って進軍するが、固く要塞を閉じたフィレンツェへの攻撃を中止せざるを得ず、結局ペテロとの協議によりフィレンツェの輸出港として重要なグロッセートを攻囲する。しかしこの間、ルードヴィヒを支持する有力者が次々と死去し、イタリアにおけるルードヴィヒに大きな打撃を与えることになる。先ずカストルツォはフィレンツェからピストイアを奪回したもののその直後に病死し、⁽⁵⁴⁾またマントヴァのパッサリーノもボローニヤの教皇特使の軍隊との戦いにおいて殺害され、⁽⁵⁵⁾更に、フェラーラの司教となったジャン・ド・ジャンダンもフェラーラに赴く途中で既に病死していた。更に従来までルードヴィヒを支持したエステ家は教会と和解し、教会はフェラーラの支配をエステ家に承認することになる。グロッセートを攻囲していたルードヴィヒは、カストルツォの死の報告を受けた後、攻囲を中止してシチリアのペテロとともに、カストルツォの息子が支配するピサへと赴いた。⁽⁵⁶⁾ルードヴィヒは先ずカストルツォの若い息子の支配権を除去し、皇帝代理としてアレツツォのタルラティーノ・タルラティーニを任命したうえ、ピサに対しコルシカとサルディニアの領有を承認した。しかしながら、当初はルードヴィヒを歓待したピサ市民も次第にアヴィニョンの教皇に対抗するル

ルドヴィヒの過激な態度に恐怖を抱きはじめ、ルドヴィヒから離れていく。しかも、ルドヴィヒの陣営で既に生じていた低地ドイツと上部ドイツの騎士の対立は、ついに前者の分離独立へと至り、前者はルドヴィヒの意図とは関係なく、マルコ・ヴィスコンティの指揮のもとルッカを占領し、これを最高値で他に売却しようとするなどの態度にでたために、ルドヴィヒは彼らとの和平を試みねばならず、このようなルドヴィヒの弱点を感じとった。ピサ市民は更に一層ルドヴィヒへの信頼を失っていく。しかし、ピサにおいてはルドヴィヒのその後の政治的思想的活動に大きな影響を与えることになる出来事が起きた。チェセナのミケーレを中心としたフランシスコ修道会士との接触である。ミケーレは、ヨハネス二十二世即位に先立つ一三一六年にナポリでフランシスコ修道会総長に選ばれていたが、その後清貧論争をめぐりヨハネス二十二世と激しく対立するに至り、異端審問を要求されていた。そこでミケーレはヨハネスの攻撃を避けるべく、当時同様に異端審問でアヴィニオンに滞在していたウィリアム・オッカムやベルガモのボナグラチア、フランチェスコ・ダスコリ及びタルハイムのハインリヒらとともに、ルドヴィヒの庇護を求めて、アヴィニオンからピサに逃亡してきた。ミケーレは当初、ニコラウス五世及びルドヴィヒの庇護を求めることは修道会全体を敵に回すことになると考え、フランス国王に自己の立場の支持を要請したが、ヨハネス二十二世の防害によりこれが実現不可能となると、ルドヴィヒの庇護を求めて五月にプロヴァンスの港エギモルトを出発しジェーノヴァからイタリアに上陸して六月九日にピサに到着していた。⁽⁵⁷⁾その間、ミケーレはポローニャのフランシスコ派総集会で再度総長に選挙されたが、これに対しヨハネスは六月六日にミケーレの破門と総長廃位を宣言する。そこでこれに応えて、七月九日ミケーレはヨハネスを断罪する書状を修道会員に送り、更に九月十八日修道会及び自己の名においてヨハネスを異端者として公けにする〈appellatio〉を書き自己の立場を正当化しようと試みるが、この直後ミケーレは九月二十一日にピサに到着したルドヴィヒと会見することになる。そこで皇帝はミケーレをフランシスコ修道会総長として認めミケーレ支持を約束し、ここにミケ

ーレを中心とする修道会とルードヴィヒの結束が生まれ、従来のマルシリウスによる理論活動と並んでオッカムのルードヴィヒ支持の理論的な活動もここから開始する。

さて、翌一三二九年一月にはニコラウス五世と七名の枢機卿もピサに到着することになるが、これに先だちルードヴィヒは前年の十二月フランシスコ派の影響が強くみられる勅令であらためてヨハネス廃位を明白に宣言してこれをピサの司教座聖堂の門戸に公示した後、ピサ市民の集会を要請した。しかしながら、フィレンツェなどのゲエルフイ党による経済的封鎖の故に食料難に陥り既にルードヴィヒへの反感をつのらせていた多くのピサ市民は、集会の当日、雹をとまなう雨と嵐に神の怒りを感じて集会に参集することはなく、しかも市民を強制的に参集させるためにルードヴィヒが送った軍隊長の突然の事故死を神判と判断し、ルードヴィヒに対する警戒心を深めていった。⁽⁵⁹⁾ ついに四月十一日、ルードヴィヒはピサを出発せざるを得なくなる。

さて、ここでルードヴィヒとミラーノのヴィスコンティ家の微妙な関係に触れておく必要があるだろう。一三二八年、ルードヴィヒはカストルツォのとりなしでガレアツォを拘禁から解放しカストルツォの傭兵としてピストイアに置いたが、ガレアツォの死後、その息子アゾ及びジョヴァンニはルードヴィヒの信頼を再び獲得し、前者はモンフォルトのヴィルヘルムに代りミラーノの皇帝代理となり、後者は一三二九年一月にニコラウス五世の新枢機卿及びロンバルディアーの教皇特使に任命された。しかし、冷静な政治家であるアゾは、ルードヴィヒに経済的援助は行いつつも、皇帝の軍隊がミラーノに入ることを拒否し、更に教皇ヨハネスの代理とも秘かに交渉を進め、教皇はルードヴィヒ失墜の場合にアゾを再び教会に受け容れることを約束して、ミラーノを聖務禁止令から解放しアゾをミラーノの正当な支配者として承認することになり、更には一月ニコラウス五世の枢機卿となりロンバルディアーの特使に任命されていた⁽⁶⁰⁾ジョヴァンニ・ヴィスコンティもアヴィニョンの教皇により、他の空位となった司教職の授与を約束されたのである。

ルードヴィヒはこのように次第に悪化する状況の中でピサを出発することになったが、ピサ市民は、皇帝がアペニン山脈を越えるや否や、皇帝代理アレツツォとタルラティーノを都市から直ちに追放しボニファティウス・デ・ドノラティコが支配者となり、経済上の封鎖から解放されるべくフィレンツェ、シエーナ及びロベルトとの接触を開始し、その後結局一三三〇年にはアヴィニヨン教皇庁と和解するに至る。他方、ルードヴィヒはピサを出発した後マルケリアでロンバルディーアのギベリーニ派支配者を召集し、更にミラーノ、クレモーナを通過した後、六月から十月までパヴィーアに滞在し、⁽⁶¹⁾ここで多くのドイツ諸侯及びフランクフルト、ゲルンハウゼン、ニュルンベルグなどの都市の使者と会見しこれらの都市に特権を付与すると同時に、またパヴィーア協定を結んで死去する直前までルードヴィヒと敵対していた兄ルドルフの後継者(プファルツ伯ルプレヒト一世及びルドルフ二世)と和解した後、アヴィニヨンの枢機卿特使ベルトラン・ドウ・プジェを既に排除していたパルマに入り、ここからゲルフィの都市ボローニヤを攻撃し、ボローニヤに居を占めていた枢機卿特使を追放しようとするが、特使は事前にこの計画を察知しフィレンツェ軍の援助をおおぐことによりルードヴィヒ派の市民を制圧し、皇帝の計画は失敗に終る。⁽⁶²⁾イタリアにおけるルードヴィヒの勢力は、最早ゲルフィ党に対し何らの脅威ともなり得ないほど弱体化していた。また、ルードヴィヒのイタリア遠征失敗とともに対立教皇ニコラウス五世も不幸な運命を辿ることになる。ルードヴィヒがピサを出発した後も、ニコラウスはピサ近郊のボニファチウス・デ・ドノラティコの居城に一時身を隠していたが、ヨハネス二十二世がピサ、フィレンツェ及びルッカの各大司教にニコラウスの逮捕を要請し、フィレンツェの軍隊がニコラウス搜索に出るに及び、再びピサ市内のボニファチウスの住居に移っていたが、ついに事は発覚し、ヨハネスはボニファチウスにニコラウスの引渡しを要求する。これに対しボニファチウスは、ニコラウスの生命の保全、罪の寛恕及びニコラウスが教皇の直接的な裁判権の下に置かれること、そして一定の年金をニコラウスに支払うことを条件に引渡しを受容し、ヨハネスは第二の条件を留保したうえで他の条件をすべて承認した。

そしてニコラウスも、自己が自らの意志でルードヴィヒから分離したこと、教皇職を放棄すること、そして、自ら行った行為を罪あるものとして放棄することをヨハネスに対して誓約した後、一三三〇年八月にアヴィニョンに召換され公開の宗教裁判で自らの非を公けに認めた。この後、ニコラウスはヨハネスの寛大な処置によりアヴィニョンのフランシスコ派修道院に身を移され、一三三三年十月に死去する。

さて、ルードヴィヒはボローニャ攻撃失敗の後十二月に一旦トレントに赴き、新たにボローニャへの進軍を試みようとしたが、オーストリアのフリードリヒ死去の知らせを受けるに及び、最早イタリアに止まることなくドイツに帰還を決心することになる。かくして、イタリアを皇帝権のもとに統一しようとするルードヴィヒの試みは失敗に終り、この後ドイツにおいて教皇ヨハネスとの論戦が更に続けられていく。

(1) バイエルンのルードヴィヒとヨハネス二十二世(及びベネディクトゥス十二世)の政治的思想的対立を詳細に扱ったものとしては、C. Müller: *Der Kampf Ludwigs des Bayern mit der römischen Kurie 2 Bde* (Tübingen 1879, 1880) がある。本論者は、この著作以外に、F. Bock: *Reichsidee und Nationalstaaten vom Untergang des alten Reiches bis zur Kündigung des deutsch-englischen Bündnisses im Jahre 1341* (München 1943) 及び G. Benker: *Ludwig der Bayer* (München 1980) を主に参考した。その他要約的な史的叙述としては G. Mollat: *Les Papes d'Avignon 1305-1378* (Paris. 10 ed 1964). pp. 192, H. Grundmann: *Wahlkönigtum, Territorialpolitik und Ostbewegung im 13. und 14. Jahrhundert* (B. Gebhardt: *Handbuch der deutschen Geschichte*, Bd 1 (Stuttgart 1970) SS. 427. がある。また、ルードヴィヒのイタリア遠征については、Giovanni Villani: *Cronica*. (ed. I. Moutier Firenze 1845) の巻 2 A. Chroust: *Beiträge zur Geschichte Ludwigs des Bayern und seiner Zeit*. Bd 1, *Die Romfahrt Ludwigs des Bayern 1327-1329*, (Gotha 1887) W. Altmann: *Der Römerzug Ludwigs des Bayern. Ein Beitrag zur Geschichte des Kampfes zwischen Papsttum und Kaisertum* (Berlin 1886) を参考に参考した。

(2) G. Benker, SS. 69.

(3) C. Müller, SS. 1, F. Bock, SS. 153.

(4) N. Valois: *Jacques Duèze, pape sous le nom de Jean XXII* (*Histoire littéraire de la France XXXIV*, 1914. p. 391-630), D. Paladilhe: *Les Papes en Avignon ou l'exil de Babylone* (Paris, 1974) p. 71-p. 108

(5) *Monumenta Germaniae Historica. Legum sectio IV. Constitutiones V (=Const. V)* n. 401, p. 340.

(6) マッテオに対する異端宣言の理由としては、「ドイツ人、キベリーニ、ロンバルディアの叛徒、及びシチリアのフレデリクスとその随従者が同盟を結ぶよう配慮し努力した」こと以外に、「断罪され火刑に処された異端者ドルチーノと結合した」ことが挙げられている。

(7) エステ家への異端宣言の理由としては、ヨハネス二十二世は真の教皇でないが故に、ヨハネスによる破門は無効であると主張したこと、聖職者を狼で悪魔の使者と呼び、教会財産の略奪を罪と考えなかったこと、四旬節に肉を食べることを罪としないこと、フェラーラを不当に領有したこと、ローマ教会を商人の集りとして批判したことなどが挙げられている。

(8) G. Benker, SS. 100.

(9) シュールブルフの戦いが「神判」であったことは W. Erben: Die Schlacht bei Mühldorf (Graz. 1923). K-G. Cram: Iudicium Belli; Zum Rechtscharakter des Krieges im deutschen Mittelalter (Münster / Köln. 1955). SS. 1.

(10) MGH. Const. V. n. 729. S. 568-S. 570.

(11) MGH. Const. V. n. 792. S. 616-S. 619.

(12) M.G.H. Const. V. n. 817. S. 636-S. 637.

(13) MGH. Const. V. n. 824. S. 641-S. 647.

(14) MGH. Const. V. n. 836. S. 655-S. 659.

(15) MGH. Const. V. n. 839. S. 661-S. 662.

(16) MGH. Const. V. n. 881. S. 692-S. 699.

(17) MGH. Const. V. n. 909-n. 910. S. 722-S. 754. この長大なザクセンハウゼンの訴書において、ルードヴィヒはおよそ次のようにヨハネスを批判している。「自らヨハネス二十二世と名乗る」者は、平和の敵であり、帝国に服する人々を叛徒へとかりたてて、イタリアのみならずドイツにおいても不和が生ずるよう腐心している。ヨハネスは、世界の諸国王や諸侯が不和であるときにのみ真の教皇、畏敬される教皇であり、特に、選帝侯の不和こそ教皇と教会の救いであり平和である。不和が存在する間は教皇は指一つ動かず、不和が解決したときのみ、自らを仲裁者と名乗るにすぎない。自ら当事者であると同時に裁定者でもある教皇は、自己の裁定をことごとく覆してしまう。また、教皇は、ロンバルディアやイタリア各地の正しき人々を異端と断罪するが、教皇の断罪により異端とされる人々はすべて帝国に服する多数派の人々である。このようにして教皇は、神が義務づけることから人々を解き、神が解くことを義務づけ、法令や聖なる教父たちが定めた法規を変更してしまう。また、教皇は教会が享受する自由と名誉がローマ皇帝コンスタンティヌスに依るものであることを忘れていた(コンスタンティヌス帝の贈与を想起)。ヨハネスの告訴においては召喚された当事者は欠席しており、そもそも召喚されてもいなかった。教皇は、キリスト教を広めるべく立ち上がった帝国を公然と破壊し、帝国の古い慣習を破壊しようと欲し、帝国へ反抗する恥ずべき者に重要な職務を与え、帝国に反抗しないかぎり、如何なる者も教皇から職務を与えられることはない。また、国王選挙については、帝国の慣習は記憶にない

程遠い過去より遵守されており、多数決で選出された者は合意により選出されたものと見做されている。選挙のために指定された場所はフランクフルトであり、戴冠のための場所はアーヒエンである。また、告訴においては、教会を不正に攻撃した人々をルードヴィヒが自らの封臣として援助したとされているが、ルードヴィヒは正当な義務を遵守したにすぎない。帝国の各地、とくにイタリアは、教皇の軍隊や特使がこれらの地を制圧すべく侵入する以前は、平和な地であった。人々が教会の側につくに及び、マッテオ・ヴィスコンティ、ガレアツォ・ヴィスコンティ、カングランデ・デルラ・スカラ、パッサリーノ・ボナコルシ、及び皇帝に忠実なジェーノヴァ市民その他の人々は追放されてしまった。また、国王選挙が合意に至らずとも、最も力のある者が優越すべきことは旧くからの慣習とされ、神はルードヴィヒに勝利を与えたのであり、対立候補の選出は無効である。それにもかかわらず、ヨハネスは不当にも自ら帝国の首長となり、ルードヴィヒの裁定者になるうとしている。また、ヨハネスは十字軍のために集められた資金を不正に使用しキリスト教徒自体に対し戦いを行い、ミラーノを攻撃している。更にヨハネスは帝国の権利を侵害するのみならず、教令へ *Ad conditorem canonum* において、フランシスコ修道会の会則にあるキリストの清貧を否定し、異端を唱えている。従って、ルードヴィヒは教会の擁護者として、ヨハネスが異端者であることを宣言し、公会議において自己の立場を擁護する用意がある……。

ザクセンハウゼンの訴書、及びこれに先行する二つの訴書 (*appelatio*) の訴訟法的性格については、A. Schütz: *Die Appelationen Ludwigs des Bayern aus den Jahren 1323/24*. (Mitt. d. Inst. f. Österr. Geschichtsforsch. LXXX. S. 71-S. 112) 参照。

- (81) H. Bansa: *Studien zur Kanzlei Kaiser Ludwigs des Bayern vom Tag der Wahl bis zur Rückkehr aus Italien (1314-1329)*, (Kallmünz 1968) S. 239-S. 243.

- (19) MGH. Const. V. n. 944 S. 779-S. 788.

- (20) *Regesta Imperii inde ab anno MCCCXIII usque ad annum MCCCXLVII. Die Urkunden Kaiser Ludwigs des Bayern, König Friedrichs des Schönen.* (ed. J.F. Böhrner) Nr. 839.

- (21) MGH. Const. VI. n. 140, n. 141. S. 96-S. 96-S. 97.

- (22) ルードヴィヒとヨハネス二十二世との対立に加えて、言うまでもなくアヴィニヨンの教皇の背後にはフランス国王が存在し、更にドイツでは、ヴィテルスバッハ家、ルクセンブルグ家、ハプスブルグ家との相互的緊張関係に加えて、ドイツ諸都市の司教座聖堂参事会と教皇(及び教皇により直接任命された司教の対立)が、ルードヴィヒの政治的立場に大きな影響を与えていた。従来、司教は、司教座聖堂参事会が選挙した者を大司教が承認し、このように *electus* され *confirmatus* された者が教皇により最終的に任命されるという手続がふまれたが、次第に教皇は、参事会が選挙した者に留保権を行使してこれを承認せず、直接自ら選んだ者を司教に任命するようになった。特にヨハネス二十二世はこの留保権を大いに利用し参事会と対立したが、ルードヴィヒは参事会の権限を擁護し、参事会が選挙した司教を支持することにより、都市及び都市の司教を自己の陣営にひき入れようとしたのである。G. Fröscher: *Die Anschauung von Papst Johann XXII*

über Kirche und Staat (Jena. Diss. 1933) SS. 28, G. Mollat : Collation des bénéfices ecclésiastique sous les papes d'Avignon (Paris 1921) SS. 386, O. Bornhak : Staatskirchliche Anschauungen und Handlungen am Hofe Ludwigs des Bayern (Weimar 1933) SS. 58.

(23) 当時、ロンバルディーアでは、ゲルフィとギベリーニの戦いはポー河の南方で展開され、教皇特使はピアチェンツァを堅固に保持する一方、ヴィスコンティ家のアゾはボルゴ・サン・ドンニノを占領し、パルマへと進軍していた。その後、教皇軍はボルゴ・サン・ドンニノを包囲し、他方ラモン・ディ・カルドーラに率いられたゲルフィのフィレンツェ軍はトスカナで勢力をのばして一三二五年ピストイアを包囲する。(Villani, K. CCXCV. p. 323)。これに対しカストルツォはヴィヴィナイアに移り、ギベリーニ派に援助を要請した。更に九月に教皇軍によるボルゴ・サン・ドンニノ包囲が弛んだとき、カングランデ、パッサリーノ・ボナコルシ、エステ家がアゾ援助に成功し、その後アゾはルッカに赴きカストルツォを支援し、両者はアルトパシオでフィレンツェ軍に決定的な打撃を与えた (Villani, K. CCCI V. p. 330)。そして十一月にアゾは、モンテヴェリオの城で包囲攻撃を受けていたパッサリーノを援助すべくモデーナに赴き、ザッポリーノでゲルフィ軍を破った。十一月二十四日、フィレンツェは十年にわたりカラブリア公カルロに政権を委ねることになる。

(24) MGH. Const. VI. n. 161 S. 112-4.

(25) マルシリウスとローマ教皇との関係については C. Pincin : Marsilio (Torino 1967) pp. 149 が詳述。また S. Riezler : Die literarischen Widersacher der Päpste zur Zeit Ludwigs des Bayern (Leipzig 1874) SS. 30, J. Quillet : La philosophie politique de Marsile de Padue. (Paris. 1970) p. 11-p. 16. 参照。マルシリウスの政治理論の内容については別稿で扱うことにする。

(26) L. Schmugge : Johannes von Jandun 1285/89-1328 (Stuttgart 1966) SS. 30. ジャン・ド・ジャンダンの政治理論の内容については別稿で扱うことにする。

(27) F. Callaey : L'idéalisme franciscain spirituel au XIV^e siècle. Étude sur Ubertain de Casale (Louvain 1911) p. 249-p. 254.

(28) C. Pincin. p. 43-p. 45.

(29) Villani, libro X. capitolo XVIII. (ed. I. Moutier 1845) Tomo III. p. 19-p. 20, C. Müller, Bd. I. SS. 164. W. Altmann, SS. 22, A. Chroust, SS. 63, F. Bock, SS. 229. また、ルードヴィヒのカストルツォの書簡 (MGH. Constit. IV. n. 242 p. 158-p. 159) 参照。ヴィラーニは次のように叙述している。「西暦一三二六(七)年一月、フィレンツェにカラブリア公が到着したことが理由となつて、ギベリーニ及びトスカナやロンバルディーアの皇帝側の君主たちは、ドイツに自らの使節を送り、ローマ人民の王として選挙されたバイエルン公爵ルードヴィヒに対し、彼らが上記カラブリア公やロンバルディーアに居る教会側の人々の力に抵抗し戦い得るよう援助を要請していた。そこで、前記のルードヴィヒは、人々の大いなる期待のもとに少しばかりの下臣を従えて、……トレントでの集会に、ケルンテン公爵と共に赴いたのである。この集会には、八百名の兵士を従えたヴェローナ領主カーネが居たが、彼は、パードヴァの支配権をめぐるケル

ンテン公爵と争っていたことから、このケルンテン公を懼れて、軍隊により武装して集会に到着した。またこの集会には、マントヴァの領主パッサリーノ、エステ家侯爵、ミラーノのヴィスコンティ家のアゾとマルコ、また、アレツツォ司教と自らを呼ぶグイド・デ・タルラーティ、カストルツォの使者、ピサの使者、ジェーノヴァから追放された者達、シチリア君主フェデリーコの使者、そして帝国側及びギベリーニのあらゆる都市の使者が参加した。この集会では先ず、前記ケルンテン公爵とヴェローナのカーネの間で休戦協定が結ばれた。引き続き二月十六日に、ローマ人民として選挙された者——破門を恐れる人々は彼を俗にバイエルンの人と呼んでいた——は、当の集会で、自己の国に戻ることもなくイタリアを通過しローマに赴くことを誓約した。そして上記の君主たちやギベリーニ派の使節は彼に、ミラーノで十五万フロリン金貨を援助することを約した。ただし、この協定にピサは参加することなく、ピサはこれとは別に彼に充分な金銭を与えて、彼がピサに入らないよう求めたのである」。

(30) MGH. Const. VI. n. 265 S. 572-S. 173. F. Bock, S. 229, S. 449.

(31) Villani, X. XIX. p. 21, C. Müller, Bd. 1, SS. 174, F. Bock, SS. 241, A. Chroust, SS. 80, W. Altmann, SS. 32. ヴィラーニの叙述によれば、「その後、西暦一三二七年五月三十一日、聖霊降臨祭の祝日、九時頃、ミラーノにおいてバイエルンの人(ルードヴィヒ)は、教皇により免職されたアレツツォの司教グイド・デ・タルラーティ及び免職され破門された……ブレッシェン司教の手により、聖アンブロジオ教会で鉄の王冠を授与された。戴冠の任にあたるべきミラーノ大司教はミラーノにとどまることを望まなかったからである。この戴冠式には、六百名の兵士を従えたヴェローナ領主カーネ、及び三百名の兵士を従えた教会への反逆者エステ家の侯爵、そして三百名の兵士を従えたマントヴァ領主パッサリーノの息子が出席し、その他の皇帝側の支配者やイタリアのギベリーニ派の人々が出席した。しかし祝祭は簡素なものであった。(ルードヴィヒは)資金と人材を得るためにミラーノに八月十二日まで滞在した。」ちなみに、ミラーノでロンバルディーアの王冠をルードヴィヒに戴冠したグイド・ダ・タルラーティは、その後カストルツォと不和になった際にルードヴィヒがカストルツォを擁護したことからルードヴィヒから離れ、ヨハネス二十二世を支持するに至る。タルラーティは「死去する前に、修道会士、聖職者及び世俗の人々の面前で、(ルードヴィヒに対する)怒りの故か、あるいは良心の故か、自らが教皇及び聖なる教会に対して誤りを犯したことを認め、教皇ヨハネスが正当で聖なること、そして自ら皇帝と名乗るバイエルン人は異端者で異端の擁護者、専政の支持者であり、不正で価値なき支配者であると述べ、もし神が自己に健康を再び与えてくれれば、常に聖なる教会と教皇に服従し、その反逆者に敵対することを誓約し、多くの涙を流して贖罪と慈悲を依頼したのである」(Villani, X. XXXV. p. 38)。

(32) C. Müller, Bd. 1, SS. 174, A. Chroust, SS. 80, F. Bock, SS. 241. また、ガレアツツォ・ヴィスコンティは、ルードヴィヒにより皇帝代理権を確認され、ジョヴァンニ・ヴィスコンティは聖職者に対する一般裁判権を与えられた。(MGH. Const. VI. n. 312. p. 222)

(33) Villani, X. XXXI p. 31-p. 32. 「既述の如く、ローマ人民の王として選挙されたバイエルンのルードヴィヒは、ミラーノで戴冠した後ミラーノに滞在し、トレントの集会で彼に約束された資金の調達を要求した。ミラーノ領主ガレアツツォ・ヴィスコンティは、その高慢で支配

者然とした態度の故に、ミラーノにおけるバイエルン人(ルードヴィヒ)よりも偉い者であるかのように振舞った。ガレアツォは一万二千人ものドイツ兵士を傭兵として有していたのである。そこで、ルードヴィヒが彼に資金を要求したとき、彼は不遜にも、自らが適切と思う時期と場所において資金を調達するとルードヴィヒに答えた。しかしこれには理由があった。というのも、彼の弟のマルコや他の兄弟をも含めてミラーノのあらゆる貴族、そしてミラーノの全市民は、彼らに対し課せられた過度の負担や税の故に、ガレアツォの専制を嫌悪していたからである。……そして、すでに、彼の支配に服していた多くの上層市民は、ルードヴィヒに不服を申し立てていた。それ故、ルードヴィヒは、ヴォギエーラに出兵していた彼の軍隊長と兵士達を帰還させ、ガレアツォに属していたすべてのドイツの傭兵と相談し秘かに彼らと誓約を交わした上で、軍隊長が帰還したときに大集会を召集した。ガレアツォとその家の者達及びミラーノのあらゆる上層市民がこの集会に加わったが、……先ず、ガレアツォの支配権が否定され、次に同じ集会で、ルードヴィヒは軍隊長に対し、ガレアツォとその息子アゾ、そしてガレアツォの兄弟マルコとルキーノを捕えるよう命じたのである。これは西暦一三二七年七月のことである。それ故、ミラーノの貴族と市民はこれを大いに喜び満了した。この後、都市は改革により、一人の皇帝代理と二十四名のミラーノの上層市民の委員会からなる支配体制が置かれた。そして彼らは直ちに五万フロリン金貨を市民から徴収して、これをバイエルン人に与えた。このようにして、神の教会は、敵でその迫害者たるバイエルンのルードヴィヒの手を通じて、同じく教会の敵たるヴィスコンティ家の高慢さに復讐したのである。かくして福音書に述べられた「私は、私の敵を私の敵によって殺すだろう」というキリストの言葉が成就されたのである。」

(34) Villani, X. XXIV. p. 25. 「六月のはじめ、バイエルン人のミラーノでの戴冠の知らせが一枝のオリヴとともにピサにもたらされたとき、フィレンツェやその他の都市から追放された人々により大篝火で祝祭がとり行われ、ピサの下層市民の何人かは、皇帝、国王ロベルト、フィレンツェの民には死がもたらされんことを。皇帝万才」と叫んだ。それ故、当時ピサを統治していた上層の裕福な市民たちは、カストルツォに敵対していたが故に、バイエルン人の到来を望まず、絶えず教皇及び国王ロベルトと交渉を続け、外部の都市から追放され(ピサに来ていた)すべての人々はピサから放逐され、バイエルン人の到来とカストルツォの支配を欲する危険な多くの市民が追放された。また不安を抱いた彼らはドイツの兵士をすべて追放し、兵士たちから騎馬を取り上げてしまった。このようにして彼らはギベリーニ党ではなく教皇派の体制を保持したのである。」

(35) G. Villani, X. XXXIII. p. 34 XXXIV (p. 35-p. 38). ポントレモニにおいてルードヴィヒと合流したカストルツォは、ピサの占領を主張したが、ピサの上層市民は、カストルツォに対する恐怖とルードヴィヒによる多額の資金援助の要求を怖れ、また、ロベルト及びフィレンツェとの協定に違背することを望まず、門戸を閉ざした。そこで、アレツォ司教タルラーティはピサの使者と交渉し、ピサは門戸を閉ざすかわりに六万フロリン金貨の援助を約したが、カストルツォがピサの使者を捕えたことから、ピサはフィレンツェに支援を要請し防衛を強化した。「ルードヴィヒはピサの門戸に何度も攻撃を加え、壁の下を掘りくずし、都市を襲撃すべく多くの奇異な道具を駆使したが、都市は堅固に防備されており、すべては効果なく終わった。それ故バイエルン人はピサ包囲のまま一ヶ月以上もの間多くの苦痛と窮乏の

状態にあった。しかし、神がピサの人々の罪を罰することを望んだのごとく、都市の支配層のあいだで対立が生じ、なかでも、ガッド伯の若い息子ファツィオ伯、及びヴァンニ・ディ・バンドウツチョ・ボンコンティは、カストルツチョの書簡と約束を得ていたが故に和約を主張し、また両者とともに都市を支配していた他の人々も恐れから同じように主張した。そこで彼らはルードヴィヒと交渉し、後者に都市の開け渡しと六万フロリン金貨の提供を協定する者を選んだ。しかし、従来よりの都市の裁判権と政治体制は維持されること、そしてカストルツチョと都市の追放者は、都市の同意なくしてピサに入ることはできず、外に止まるべきことが要求された。そして、このような偽の協定がバイエルン人により受諾され誓約された後、市民はルードヴィヒに我々の暦によれば西暦一三二七年十月八日に都市を開け渡し、その直後十月十一日の日曜日にバイエルン人とその妻はすべての兵士とともに、如何なる事件も生ずることなく平和に都市に入った。しかし、その三日後、ピサの市民は自らの手で、ルードヴィヒの意になうべく、また恐怖心の故に、協定書を焼却し都市の支配権を自主的に合意によりルードヴィヒに渡してしまった。彼らは下層市民の要求により、こうせざるを得なかったのである。そして、カストルツチョ及びピサの追放者も都市に呼ばれ、直ちに都市に入った。この際、次のこと以外に特別な事件は起らなかった。すなわち、ピサの傭兵隊長であったグリエルモ・ダ・コロンナータが、ルードヴィヒの兵隊長の一人に連れられてルードヴィヒのところに来た際に、下層の市民が背後から彼をのしつた。このとき、この兵隊長は広場において主人たるルードヴィヒの面前で、ルードヴィヒを満足させるためにこの市民を殺害したのである。それ故、ルードヴィヒは正義を公けに示すべく、このクラード・デルラ・スカラという名のドイツ人を捕え、その頭を切り落した後、ピサ及びその周辺領域においてはあらゆる種類の人々は、財貨一リブラにつき八ダナリーの税を支払えば安全無事に通行が可能であることを知らせたのである。このようにしたのは、ピサから商人が脱出せず、ピサ市民が利益を得たときにルードヴィヒがより多い収入を得るためであった。」(p. 35-p. 37)

(36) G. Villani, X. XXXVII. p. 39.

(37) MGH. Const. VI. n. 273-n. 277. SS. 175.

(38) MGH. Const. VI. n. 361 p. 264-p. 268. 同時にヨハネスはこれとは別の教令で、マルシリウスの「平和の擁護者」にみられる以下の五つの見解を異端として断罪している。「⁽¹⁾使徒ペテロは他のすべての使徒と同様に教会の首長ではなく他の使徒以上に権威を有するわけではない。そして、マテオ福音書にある如くキリスト自ら皇帝に租税を支払ったのは、……キリストが寛大さや敬虔な感情からこれを行ったのではなく、強制されて行ったのである。そしてまた⁽²⁾使徒ペテロは他の使徒以上の権威をもたず他の使徒たちの首長でないのであれば、キリストは教会に如何なる首長も置いたことはなく、また何らかの代理者を任命したわけでもない。更に⁽³⁾教皇を正したり罰すること、そして教皇を任命し廃位することは皇帝の権限に属する。そして⁽⁴⁾教皇であれ、また大司教や単なる司祭であれ、あらゆる聖職者は、キリストの定めに従えば、すべて平等の権威と裁判権を有している。ある聖職者が他より多くの権威や裁判権を有するのは、皇帝が各々の聖職者に多くあるいは少く権限を付与したからであり、従って皇帝は、これらの権限を授与することも取消することも可能である。最後に⁽⁵⁾教皇も、また教会の

全聖職者の集会も、皇帝が彼らにその権限を与えないかぎり、罪ある如何なる者をも強制的に処罰することはできない。」以下、これらの見解を異端とする宣言が続く。Rinaldi (ed.): *Annales ecclesiastici*, vol. V. (Luca 1750) p. 353.

(39) Villani, X. XX. p. 21-p. 22. 「ローマ人民の王として選挙されたバイエルン人が(イタリアに)到来すると同時に、イタリアの殆んどの地域ではその知らせを受けて直ちに新しい活動が生じた。ローマ市民も団結して行動を開始した。というのも、ローマには教皇の宮廷も皇帝の宮廷も存在しなかったからである。ローマ市民は、ローマのあらゆる貴族や権力者から支配権と居城を取り上げ、彼らを追放した。追放された者のなかにはナポレオーネ・オルシーニとステファノ・デルラ・コロンナもいた。両者は少し以前に国王ロベルトによりナポリで騎士の称号を与えられていたが、ローマ市民は両者がローマの支配権をプリアの王ロベルトに譲り渡しはしないと恐れたのである。そして、シャルラ・デルラ・コロンナがローマのカピターノ・デル・ポポロとして宣言され、彼は、ローマの各地区より四人づつ選ばれた五十二名の代表から成る委員会とともに都市を統治した。他方ローマ市民は、プロヴァンスのアヴィニオンに居る教皇ヨハネスに使節を送り、教皇にはローマに滞在する正当な義務があり、それ故ヨハネスが教皇庁をローマに移すべきことを要求した。そして、もし教皇がこれを行わなければ、ローマ市民は上記のバイエルンのルードヴィヒをローマ人民の王たる支配者として受け容れることを宣言したのである。同様に市民はバイエルン人と呼ばれるルードヴィヒを動かすために使節を送った。……教皇は使節を通じてローマ市民に対し、このルードヴィヒは異端者で破門され、聖なる教会の迫害者なるが故に、バイエルン人を彼らの王として受け容れないよう戒告し、彼らを勇気づけ、適切な時期に必ずローマに赴くと返答した。しかしローマ市民は彼らの誤った態度を中止することなく、教皇、バイエルン人、国王ロベルトと交渉しながら、三者の各々にローマ市を自らの手で保持する意向を伝え、民主制により自らを統治しながらも、実は自分達がギベリーニ派で皇帝派であることを隠そうとしたのである。」また、W. Altmann, SS. 58 参照。

(40) Villani, X. LIV. p. 50-p. 51. 「このようにして、バイエルン人は自己の臣下とともに一月五日の水曜日ヴィテルボの町を出発し、その週の木曜日、一三二七(八)年一月七日九時に、四千の兵士を従えて何の抵抗にも出会うことなくローマに到着した。……彼はローマ市民のたいなる歓迎のもとに受け容れられサン・ピエトロ宮殿に居を構え、そこに四日間滞在した後、テヴェレ河を渡りサンタ・マリーア・マッジョーレに移り住んだ。そして次の月曜日にカンピドーリオに上がり大集会を催した。そこにはルードヴィヒの統治を望むローマの全市民や他の人々が集まった。この集会においてアウグスチヌス会に属するアレリア司教がルードヴィヒに代り莊重な言葉を述べ、ローマ市民がルードヴィヒに認めた名譽を感謝した後、ルードヴィヒがローマ市民を支援し統治する意図のあることを宣言且つ約束し、またローマ市民を幸多き状態に保つことを約束した。そこでこれを大いに喜んだ市民は、我らの主、ローマ人民の王万才と叫んだ。この集会でルードヴィヒの戴冠は次の日曜日に定められ、ローマ市民は彼を元老院議員とし、また一年間カピターノ・デル・ポポロに任命した。また注意すべきことは、バイエルン人と共に、教会への反逆者で離教者である多数の聖職者、司祭やあらゆる修道会の会士がローマに來たことであり、ローマは、教皇ヨハネスへの反抗によりキリスト教の異端者となった人々の巢窟となったのである。それ故、カトリック教徒たる多くの聖職者や修道会士

はローマから離れてしまった。聖なるローマの地は聖務を禁止され、離教し破門された聖職者が聖務をとり行わないかぎりミサの歌は聴かれず鐘も鳴りわたることはない。バイエルン人は、シアルラ・デルラ・コロンナに委任して、従来より聖務を担当してきたカトリック教徒の聖職者を聖務へと強制したが、誰もこれを行なうことを望まなかった。そしてキリストの「ヴェロニカの帛」は、これを保管していたサン・ピエトロの参事会員により秘かに持ち去られていた。」

(41) Villani, X. LV. p. 51-p. 53. 「一二三七八年一月十七日の日曜日、ローマ人民の王として選挙されたバイエルン公爵ルードヴィヒは、ローマのサン・ピエトロ寺院で、すぐ後に叙べられるように、大いなる榮譽と勝利のなかで戴冠した。すなわち、ルードヴィヒとその王妃は兵士とともに、今まで滞在していたサンタ・マリーア・マッジョーレ教会を朝に出発し、サン・ピエトロへと赴いた。彼らの前には、ローマの各区域から四名の市民が旗をもち騎行し、騎馬は高価な布で飾られ、その他多くのローマ市民以外の者たちが進行した。街路はすべて清掃され、ミルテの花と月桂樹で一杯になり、また家々の上からは各家が所蔵する華美な掛け布や織物、装飾品などが垂れ下げられた。戴冠式の有様及び戴冠をとり行った者については次の如くである。すなわち、カピターノ・デル・ポポロであるシアルラ・デルラ・コロンナ、及び元老院議員であるブッチョ・デイ・プロレッソとオルシーニ家のオルシーノ、そしてローマの騎士たるピエトロ・デイ・モンテネロの四名はすべて金色の服をまとい、これらの者たちと共に、五十二名の市民が戴冠に参加した。そして、その称号が示すように、常にローマの長官 (prefetto) がこれら市民の先頭に立った。上記の四名——一名のカピターノ・デル・ポポロ、二名の元老院議員及び一名の騎士——とジャークポ・サヴェルリ、サント・スタジオのティバルド及び他の多くのローマの貴族がルードヴィヒの騎馬を導びいていた。またその間つねに、ルードヴィヒの前を、帝国法の摘要を持した裁判官が行進した。ルードヴィヒはこの法に従って戴冠をとり行ない、そこには次のこと以外には如何なる瑕疵も存在しなかった。すなわち、教皇が不在であり、ラテラン宮中伯はローマを去っていたので両者による祝別と確認が行われなかった。帝国法によれば、ラテラン宮中伯がサン・ピエトロの中央祭壇で聖油式をとり行うべきものとされ、皇帝が帝冠を脱ぐとき帝冠を受けとるのも宮中伯とされているからである。そこで、ルードヴィヒは戴冠するに先立ち、ルッカ公爵カストルッチョを宮中伯に任命した。……これが終わった後、バイエルン人は、教皇と枢機卿特使の代りに、離教者で破門された司教、つまりダ・プラート枢機卿の甥であるヴェネチアの司教、及びアリエラの司教により聖別され、同じ仕方で彼の妃も皇妃として戴冠した。戴冠の後、ルードヴィヒは三つの勅令を読みあげた。第一はカトリックの信仰に関するもの、第二は聖職者の名誉と崇敬に関するもの、第三は寡婦と孤児の利益の保護に関するものである。……以上のような方法でバイエルンのルードヴィヒは大いなる不名誉のもとに、教皇及びローマ教会の意に逆い、聖なる教会に対して如何なる崇敬をも払うことなく、ローマ人民の皇帝及び王として戴冠したのである。ここで銘記すべきことは、断罪されたバイエルン人の傲慢さである。古い年代記にも新しい年代記にも、キリスト教徒の皇帝で教皇ないしその特使によらずして戴冠した者は一人も見い出すことができない。すべては教会に逆ってなされたことであり、このバイエルン人以外には過去にも、将来にも、このような者は見い出せないだろう。これは極めて驚くべき事態であつた。」

(42) C. Müller, Bd. I. SS. 181. W. Altmann, SS. 79.

(43) Const. VI. n. 361. n. 427. n. 428.

(44) MGH. Const. VI. n. 435. p. 343. C. Müller, S. 183.

(45) Villani, X. LXVII. p. 62-p. 63. 「西暦一三二八年四月十四日、皇帝及びローマ人民の王と宣言されたバイエルンのルードヴィヒは、ローマのサン・ピエトロ教会の前の広場で集会を催した。教会の階段に大きな機敷がもうけられ、そこに皇帝として盛装したルードヴィヒが立ち、多くの聖職者、司祭、ローマの僧侶、ルードヴィヒに随行した彼の党派の人々、そして多くの法学者や法律顧問が、皇帝に随伴した。ルードヴィヒはローマ人民の面前で、彼が自ら新たに創った下記の法令を發布し、読みあげた。その要約的内容は次のとおりである。先ず、神及び皇帝の大権に対し異端と判断されたあらゆるキリスト教徒は、旧くから法により定められた規定に従い死罪を科せられるべきである。……更に彼は、すべての公証人は自らの作成する証書の中に皇帝の統治年と皇帝の名を記すべきこと——つまり、我々の卓越せる偉大な主、ローマ人民の皇帝ルードヴィヒの治世何々年といった記載をすべきこと——、そして、そうでなければ証書は無効であるべきこと命令した。また、彼は、神聖なる皇帝及びローマ人民に対する不服従者反逆者を支援ないし助言したあらゆる者は財産没収の刑を科されること、そしてこの者の財産は皇帝裁判所の管轄に属することを命じた。これらの勅令はバイエルン人の悪しき判断によって熟慮の末に創られ發布されたものであり、この法により彼は教皇ヨハネスと正しい教会に対する自己の悪しき邪な意図を実現しようとしたのである。」

(46) Villani, X. LXIX. p. 63-p. 65. 「その直後、次の月曜日、同じ年の四月十八日に、前の木曜日に行われたのと同じ仕方、聖ピエトロ教会前の広場で集会を催し、聖俗あわせたローマの市民を召集した。ルードヴィヒは前述の機敷の上に、深紅の衣をまとい、王冠をかぶり、右手に王笏、左手に金の林檎をもち、皇帝として立ち現われ、すべての人々が彼を観れるように、高いところにある豪華な玉座にすわり、人々を聖職者や貴族、武装した騎士たちが取り囲んだ。皇帝が座についたとき、沈黙が要求され、アウグスチヌス修道会 (ordine de romitani) の会士ニッコラ・ディ・ファツブリアーノが説教壇に進み出て、高い声で「自ら教皇ヨハネス二十二世と名乗る司祭ジャック・ドゥ・カオール (ヤーコポ・ディ・カオルサ) を擁護しようとする者なりや否や」と叫び、これを三回繰返したが、答えはなかった。次に、学識豊かなドイツの僧侶が説教壇に進み、「今日日は善き使者の日……」という聖書の言葉をラテン語で述べ、この言葉につき立派な説教を行った。この後、長大で多くの言葉と誤った論証で飾られた宣告が読みあげられた。これは事実、次のようなものである。先ず、序文においては、現在の聖なる皇帝がローマ市民の名譽を望み、また、ローマ市民の状態を回復させることを望んで、自己のドイツ王国と未だ青年期にある自己の若い息子を残したままドイツを離れ、少しの遅れもなくローマに到着したこと、そしてローマが世界及びキリスト教信仰の中心であるにもかかわらず、ローマに (皇帝の) 世俗の座も (教皇の) 霊的座も空位であることを認識したことが述べられ、また、(ルードヴィヒが) ローマに居るとき、彼の前に、自己を僭越にもヨハネス二十二世と名乗る者が現われ、ローマに属している枢機卿の職務をアヴィニョンの都市に移そうと望んだこと、そして枢機卿がこれに反対しなければこの試みを中止しなかったことが述べられている。次にルードヴィヒは、ジ

ヤック・ドゥ・カオールがローマ市民に対して十字軍を宣言したことを知り、そしてこの宣言をローマ市民の五十二名の統治者及び他の有識者に知らせることが適切であると考えた。それ故、ローマ市の聖職者及びローマ市で統治権を有する市民の集団はルードヴィヒに對し、昔オットー三世がそうしたように、彼がジャック・ドゥ・カオールを異端として告訴し、ローマ教会及びローマ人民に、キリスト教の信仰者たる聖なる教皇を与えるように提案し要請したのである。そこでルードヴィヒは、全世界とキリスト教を代表するローマ市民及び聖なるローマ教会の敬虔なる信仰を配慮し、次のような仕方ではジャック・ドゥ・カオールを異端者と見做し告訴したのである。すなわち第一に、アルメニア王国がサラセン人により攻撃されたとき、ジャック・ドゥ・カオールはフランス国王がそこに武装したガレー船の援助軍を送ることを望んだが、結局彼はこの軍隊をキリスト教徒に對し、すなわちシチリア人に對しさし向けたのである。更にまた、ドイツの聖マリア会士によりサラセン人への軍隊派遣が要請されたとき、彼は「我々自身のなかにサラセン人が居る」と答えたのである。また彼は、常に清貧を愛したキリストがその使徒とともに財産を共有したと主張した。そして次に、彼がその他重大な異端の罪に陥っていること、なかでも特に重大なのは、彼がヨアブ——すなわちプロヴァンス伯ロベルト——の助言に従って、靈的な支配権と俗的な支配権を所有しようと欲したことである。しかし、これは聖書に反している。というのも、キリストは靈的なものと俗的なものを区別しようと欲し、「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」と述べているからであり、聖書の他の部分では、「私の王国はこの世のものではない。もし私の王国がこの世のものであるならば、私の兵士は（私をユダヤに引渡さぬよう戦ったであろう）」云々とあり、結論として「私の王国はこの世のものではない」と述べられているからである。それ故、ジャック・ドゥ・カオールは上記その他様々な重大なる異端の罪を犯したのである。また彼は傲慢にも皇帝権に反抗し、皇帝の選挙を自ら処理し、取り消そうと試みた。しかし、皇帝選挙は、それが為されれば直ちに、まさにこれを根拠として確定するのであり、如何なる者の確認をも必要とせず、従って皇帝は誰にも服従せず、むしろ全世界の人々が皇帝に服従するのである。それ故、異端や皇帝反逆罪といったかくも重大な罪をジャック・ドゥ・カオールは犯したのであるから、たとえ彼が召喚されなくとも——現在の皇帝が立法した新しい法律、及び他の教会法や帝国法により召喚は不必要とされている——ジャック・カオールからは教皇職やその他すべての世俗的宗教的職務や特権が取り上げられ剝奪抹消される。そして彼は世俗的裁判権を有し彼を罰しうるすべての人々に、異端者及び皇帝反逆者として服することになる。また、如何なる国王、王侯、貴族、そして都市も、彼を援助し助言を与え支持してはならず、彼を教皇と見做すべきでもない。これを行なう者は、聖職者たると否にかかわらず、罰としてすべての職務は剝奪され、異端の擁護者、大逆罪を犯した者として断罪される。処罰と断罪の半分は皇帝の裁判所で下され、他の半分はローマ市民により下される。……以上のような宣告を下し、これを確認した後で、バイエルンのルードヴィヒは、数日後には善き教皇、善き司牧者が与えられることを宣言し、ローマ市民及びあらゆるキリスト教徒はこれに大きな安堵を抱いたのである。』ルードヴィヒの勅令は、MGH. Const. VI. n. 436. S. 344-p. 350. 参照。

(47) ここにみられる清貧論争への言及からカサレのウベルチーノがこの勅令の作成に参加したと想定する A. Mussatus: Ludovicus Bavarus (J. G. Graevius, P. Burmann ed. Thesaurus Antiquitatem et Historiarum Italiae, Leyden 1722 t. VI) p. 362 に於いて F.

Callaey, op. cit. p. 249-p. 254 は否定的である。また G.L. Potestà; *Storia e escatologia in Ubertino da Casale* (Milano 1980 S. 24 参照。これに対しマルシリウスの参与は充分考えられるが、これも必ずしも明白とは言えない。C. Pincin, op. cit. p. 162. n. 57 参照。

(48) MGH. Const. VI. n. 438. p. 361-p. 362. G. Villani, X. LXXI. p. 67-p. 68 参照。

(49) G. Villani, X. LXXII. p. 68-p. 69. 「西暦一三二八年五月十二日、キリスト昇天祭の朝、サン・ピエトロ教会の前に、ローマ市民の男女が各自望むがままに集り、皇帝と名乗るバイエルンのルードヴィヒは帝冠を被り、皇帝の衣をまといサン・ピエトロ教会の階段の上の説教壇に進み出た。多くの聖職者、修道会士及びローマのカピターノ・デル・ポポロたちが彼に付き従い、彼の周囲にはまた彼の多くの封臣が居た。ルードヴィヒは彼の面前に一人の修道会士ピエトロ・ダ・コルヴァラを来させた。この者はティボリとアブルツツイの二つの地域が接する所で生まれ、フランシスコ修道会に属し、従来善良な人間で聖なる生活を送ってきたものと考えられていた。この者が来たとき、バイエルン人は玉座から立ち上がり、修道士ピエトロを天蓋の下に坐らせた。この後、アウグスチヌス修道会のニコラ・ダ・ファツプリアーノが立ち上がり、次のような聖書の言葉、すなわち「我にかえったペトロは『主の天使が来て、我々をヘロデの手から解放し、ユダヤ人のあらゆる党派から救ってくれた』という言葉につき説教を行った。ここではバイエルン人が天使に、教皇ヨハネスがヘロデにたとえられている。この言葉について多くの説教が語られた後、ヴェネチアの司教が前に現われ、人々に対して、上記の修道会士ピエトロを教皇として欲するか否かを三回繰り返し尋ねた。ローマ市民はこれに大いに動揺したが、ローマ教皇を新たに持つことができると信じ、不安を感じながらも、『然り』と叫んで答えたのである。その後、バイエルン人は立ち上がり、前記の司教が、ローマ市民による教皇選挙を確認する一つの勅令を読みあげた。そして、バイエルン人はこの教皇をニコラウス五世と名付け、後者に指輪を与え、衣を着せ、自分の右側に坐らせた。その後両者は立ち上がり、大いなる勝利の下にサン・ピエトロ教会へと入っていった。……このような反立教皇の宣言と確認により、ローマの大半の人々は極めて動揺し、バイエルン人が信仰と聖なる教会に反した行動をしているのではないかと考えた。」

(50) G. Villani, X. LXXIV. p. 70. すなわち、教皇ヨハネスにより廃位されたヴェネチア司教、ミラーノの聖アンブロジオ修道院長、ヨハネス廃位の宣言を読みあげたドイツの修道院長、ニコラ・ダ・ファツプリアーノ及び三人ローマ市民、エルモニコ・テバルディ、ピエトロ・オリンギそしてジャンニ・アルロットである。

(51) G. Villani, X. LXXV. p. 71.

(52) G. Villani, X. LXXIII. p. 69.

(53) G. Villani, X. XCIV. p. 88-p. 90. 「(彼らが)ローマを出発する際に、ローマ市民はルードヴィヒと偽の教皇及び兵士たちをのしり、彼らを異端者、破門された者と叫び、大いに忠誠心の篤いところを示した。彼らは「汝らに死を、汝らに死を、聖なる教会万才」と叫び、そして退去する彼らに石を投げて傷を負わせ、一人の兵士を殺し、忘恩にも彼らを嘲笑しながら追い立てていった。それ故バイエルン人

は強い恐怖を感じ、不名誉にも、逃げ去るようにそこから去っていった。」p. 89)

(54) G. Villani, X. LXXXVI. p. 80-83.

(55) G. Villani, X. XC VII. p. 92-p. 93.

(56) A. Chroust, SS. 179.

(57) L. Baudry, Guillaume d'Occam. Sa vie, ses oeuvres, ses idées sociales et politiques. I. (Paris 1949). p. 111-p. 117.

(58) MGH. Const. n. 437. S. 350-S. 361, n. 528. S. 437-439. この勅令は、もっぱら清貧論争に関するヨハネスの教令へ *Ad conditionem*、〈*Quia quorundam*〉に含まれた異端の断罪にあてられ、四月十八日のヨハネス廃位の勅令が、ヨハネスの皇帝大逆罪に重点が置かれていたのと対照的である。四月十八日の勅令が、ヨハネス断罪のために不充分であることを示唆したのはおそらくチェセナのミケーレであり、ミケーレは、四月十八日の勅令の如く皇帝が靈的事項に介入することに疑念を抱き、ヨハネス廃位の根拠を専ら清貧論争という靈的問題に置くようルードヴィヒに求めたと思われる。この勅令の発布については、G. Villani, X. CXL. p. 106-p. 107, W. Altmann, SS. 119. C. Müller, Bd. I. S. 211, A. Chroust, SS. 204.

(59) G. Villani, X. CXIX. p. 114. 「このとき、誰の目にも明白にそれとわかる大きな奇跡が起きた。上記の集会が召集されたとき、突然、怖ろしい強風とともに、今までピサに降ったこともないような雹と雨をともなう大きな嵐が天から到来したのである。それ故、ピサ市民の多くは、前記の説教に行かない方がよいと考え、また悪い天候の故もあり、ごく少数の市民しか集会に集まらなかった。そこでバイエルン人は都市の上層の人々を集会での説教に強いて出席させるために、武装した兵士や歩兵とともに一人の軍隊長を町に派遣した。しかし、どれ程力行使しても、少数の者しか集会に来なかった。しかも、この軍隊長は、嵐の最中に町を騎馬で乗り回したことから風邪をひき、これを直すために夕方風呂を準備し、風呂の中に火酒を混ぜさせた。しかし、彼が風呂に入っているとき火がつき、直ちに軍隊長は風呂の中で火に包まれ焼死したのである。害を受けたのは彼だけであった。この事態は神の大きいなる奇跡と見做され、バイエルン人や反立教皇が行った不当なる告訴を好まなかった神が彼らに対して与えた悪しき徴候と見做された。」

(60) G. Villani, X. CXV. p. 110.

(61) G. Villani, X. CXXVI. p. 118, W. Altmann, S. 127. A. Chroust, SS. 219.

(62) G. Villani, X. CXXXIX. p. 129, CXLIV. p. 133-p. 134, CXLV. p. 134-p. 135.